

500P0427 W 0 00

PCT/JP00/01272

29.03.00

09/674651

4  
日本国特許庁

PATENT OFFICE  
JAPANESE GOVERNMENT

REC'D	14 APR 2000
WIPO	PCT

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日

Date of Application:

1999年 4月 2日

出願番号

Application Number:

平成11年特許願第096282号

出願人

Applicant (s):

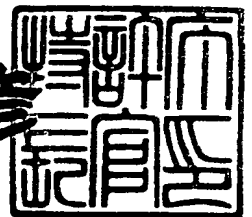
ソニー株式会社

PRIORITY  
DOCUMENT  
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN  
COMPLIANCE WITH RULE 17.1(a) OR (b)

2000年 3月 3日

特許庁長官  
Commissioner,  
Patent Office

近藤隆彦



出証番号 出証特2000-3013339

【書類名】 特許願

【整理番号】 9900098602

【提出日】 平成11年 4月 2日

【あて先】 特許庁長官 伊佐山 建志 殿

【国際特許分類】 H04N 7/13

【発明者】

【住所又は居所】 東京都品川区北品川 6 丁目 7 番 3 5 号 ソニー株式会社  
内

【氏名】 横田 哲平

【発明者】

【住所又は居所】 東京都品川区北品川 6 丁目 7 番 3 5 号 ソニー株式会社  
内

【氏名】 木原 信之

【発明者】

【住所又は居所】 東京都品川区北品川 6 丁目 7 番 3 5 号 ソニー株式会社  
内

【氏名】 岡上 拓巳

【特許出願人】

【識別番号】 000002185

【氏名又は名称】 ソニー株式会社

【代表者】 出井 伸之

【代理人】

【識別番号】 100082762

【弁理士】

【氏名又は名称】 杉浦 正知

【電話番号】 03-3980-0339

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 043812

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9708843

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 データ処理装置および方法

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 着脱自在とされた不揮発性メモリを使用するデータ処理装置において、

ディジタルオーディオ信号を高能率符号化により符号化し、所定のデータ単位の符号化オーディオデータを出力する符号化手段と、

不揮発性メモリに対して書き込む上記符号化オーディオデータを暗号化し、上記不揮発性メモリから読み出した暗号化された上記符号化オーディオデータを復号化する暗号化手段と、

上記データ単位の先頭に少なくとも所定数毎に付加された所定のコードによって、内部の異常を検出する検出手段と  
からなることを特徴とするデータ処理装置。

【請求項 2】 請求項 1 において、

上記不揮発性メモリの 1 ブロックにヘッダと整数個の上記データ単位とが入るように設定されていることを特徴とするデータ処理装置。

【請求項 3】 請求項 1 において、

上記検出手段は、

上記データ単位の先頭のコードが上記所定のコードでないと判定するときに、上記データ単位に対してミュート処理を行うようにしたことを特徴とするデータ処理装置。

【請求項 4】 請求項 1 において、

上記所定のコードによって、圧縮モードを識別するようにしたことを特徴とするデータ処理装置。

【請求項 5】 請求項 1 において、

上記所定のコードによって、上記ディジタルオーディオ信号の左右チャンネルを識別するようにしたことを特徴とするデータ処理装置。

【請求項 6】 請求項 1 において、

上記暗号化手段が直前の暗号化出力とデータとの排他的論理和によって生成さ

れた値をキーによって暗号化するものであって、

暗号化されたデータを上記キーによって復号し、上記復号によって得られた値と、直前の暗号化出力との排他的論理和によって、生成されたデータの中から上記所定のコードを検出し、

上記データ単位の先頭のコードが上記所定のコードでないと判定するときに、上記データ単位に対してミュート処理を行うようにしたことを特徴とするデータ処理装置。

【請求項 7】 請求項 1 において、

暗号化されたデータをキーによって復号し、上記復号によって得られた値と、直前の暗号化出力との排他的論理和によって、生成されたデータの中から上記所定のコードを検出し、

上記データ単位の先頭のコードが上記所定のコードでないと判定するときに、上記データ単位に対してミュート処理を行うようにしたことを特徴とするデータ処理装置。

【請求項 8】 着脱自在とされた不揮発性メモリを使用するデータ処理方法において、

ディジタルオーディオ信号を高能率符号化により符号化し、所定のデータ単位の符号化オーディオデータを出力するステップと、

不揮発性メモリに対して書き込む上記符号化オーディオデータを暗号化し、上記不揮発性メモリから読み出した暗号化された上記符号化オーディオデータを復号化するステップと、

上記データ単位の先頭に付加された固定値によって、内部の異常を検出するステップと  
からなることを特徴とするデータ処理方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

この発明は、例えばオーディオデータを暗号化し、記録する媒体として、機器に着脱自在のメモリカードに適用して好適なデータ処理装置および方法に関する

【0002】

【従来の技術】

E E P R O M (Electrically Erasable Programmable ROM) と呼ばれる電氣的に書き換え可能な不揮発性メモリは、1ビットを2個のトランジスタで構成するために、1ビット当たりの占有面積が大きく、集積度を高くするのに限界があった。この問題を解決するために、全ビット一括消去方式により1ビットを1トランジスタで実現することが可能なフラッシュメモリが開発された。フラッシュメモリは、磁気ディスク、光ディスク等の記録媒体に代わりうるものとして期待されている。

【0003】

フラッシュメモリを機器に対して着脱自在に構成したメモリカードも知られている。このメモリカードを使用すれば、従来のC D (コンパクトディスク)、M D (ミニディスク) 等のディスク状媒体に換えてメモリカードを使用するデジタルオーディオ記録／再生装置を実現することができる。

【0004】

従来、パーソナルコンピュータで使用されるファイル管理システムは、F A T (File Allocation Table) ファイルシステムと呼ばれる。このシステムでは、必要なファイルが定義されると、その中に必要なパラメータがファイルの先頭から順番にセットされていた。その結果、ファイルのサイズが可変長で、1ファイルが1または複数の管理単位(セクタ、クラスタ等)で構成される。この管理単位の関連事項がF A T と呼ばれるテーブルに書かれる。このF A T ファイルシステムは、記録媒体の物理的特性と無関係に、ファイル構造を容易に構築することができる。従って、F A T ファイルシステムは、フロッピーディスク、ハードディスクのみならず、光磁気ディスクでも採用することができる。上述したメモリカードにおいても、F A T ファイルシステムが採用されている。

【0005】

ここで、最近特に音楽のデジタル録音のコピーに関しての著作権の主張は厳しくなる一方である。これに反してパーソナルコンピュータの技術を応用すると

限りなく容易に音楽のデジタル録音のコピーを作ることができる。そこで、次世代の音楽のデジタル録音のオーディオデータは、コピーが容易に出来ることを前提に、そのオーディオデータが例えコピーされても容易には再生出来ないようオーディオデータに対しても暗号化を施すことが提案されている。

【0006】

【発明が解決しようとする課題】

この暗号化が行われると、生成されるデータが乱数のような状態になるので、レコーダ内部で何かの原因で再生出力が異常となるような状態になっても、その異常を検出することがかなり難しくなる問題があった。若し、再生出力の異常を検出できない場合、クリック音などの刺激音でイヤホンを通して耳を傷めたり、スピーカを損傷する可能性がある。

【0007】

従って、この発明の目的は、オーディオデータに対して暗号化を施している場合でも、異常な再生出力が生じることを防止できるデータ処理装置および方法を提供することにある。

【0008】

【課題を解決するための手段】

請求項1に記載の発明は、着脱自在とされた不揮発性メモリを使用するデータ処理装置において、デジタルオーディオ信号を高能率符号化により符号化し、所定のデータ単位の符号化オーディオデータを出力する符号化手段と、不揮発性メモリに対して書き込む符号化オーディオデータを暗号化し、不揮発性メモリから読み出した暗号化された符号化オーディオデータを復号化する暗号化手段と、データ単位の先頭に少なくとも所定数毎に付加された所定のコードによって、内部の異常を検出する検出手段とからなることを特徴とするデータ処理装置である。

【0009】

請求項8に記載の発明は、着脱自在とされた不揮発性メモリを使用するデータ処理方法において、デジタルオーディオ信号を高能率符号化により符号化し、所定のデータ単位の符号化オーディオデータを出力するステップと、不揮発性メ

メモリに対して書き込む符号化オーディオデータを暗号化し、不揮発性メモリから読み出した暗号化された符号化オーディオデータを復号化するステップと、データ単位の先頭に付加された固定値によって、内部の異常を検出するステップとからなることを特徴とするデータ処理方法である。

#### 【0010】

着脱可能な不揮発性メモリの消去単位である1ブロックにヘッダと整数個のサウンドユニットとが設定される。ブロックの先頭のSUの先頭の1バイトが読み出される。その1バイトの上位6ビットと、所定のコード（固定値）とが比較され、一致していれば、そのデータの再生出力には異常がないと判定し、一致していなければ、そのデータの再生出力は異常であると判定する。再生出力が異常であると判定された場合、再生時は、すぐに再生音にミュートがかけられ、録音時は警告するか、システムにリセットをかけて再生出力の異常が解決するか様子を見る。

#### 【0011】

##### 【発明の実施の形態】

以下、この発明の一実施形態について説明する。図1は、この発明の一実施形態の全体の構成を示す。この一実施形態は、記録媒体として、着脱自在のメモリカードを使用するデジタルオーディオ信号のレコーダ（記録および再生機）である。より具体的には、このレコーダは、アンプ装置、スピーカ、CDプレーヤ、MDレコーダ、チューナ等と共にオーディオシステムを構成する。この発明は、これ以外のオーディオレコーダに対しても適用できる。例えば携帯型レコーダに対しても適用できる。また、衛星を使用したデータ通信、デジタル放送、インターネット等を経由して配信されるデジタルオーディオ信号を記録するレコーダに対しても適用できる。さらに、デジタルオーディオ信号以外に動画データ、静止画データ等の記録／再生に対してもこの発明を適用できる。一実施形態においても、デジタルオーディオ信号以外の画像、文字等の付加情報を記録／再生可能としている。

#### 【0012】

レコーダは、それぞれ1チップICで構成されたオーディオエンコーダ／デコ



ーダ IC10、セキュリティ IC20、DSP (Digital Signal Processor) 30 を有する。40 は、レコーダに対して着脱自在のメモリカードである。メモリカード 40 は、フラッシュメモリ（不揮発性メモリ）、メモリコントロールブロック、DES (Data Encryption Standard) の暗号化回路を含むセキュリティブロックが 1 チップ上に IC 化されたものである。なお、この一実施形態では、DSP 30 を使用しているが、マイクロコンピュータを使用しても良い。

#### 【0013】

オーディオエンコーダ／デコーダ IC10 は、オーディオインタフェース 11 およびエンコーダ／デコーダブロック 12 を有する。エンコーダ／デコーダブロック 12 は、デジタルオーディオ信号をメモリカード 40 に書き込むために高能率符号化し、また、メモリカード 40 から読み出されたデータを復号する。高能率符号化方法としては、ミニディスクで採用されている ATRAC (Adaptive Transform Acoustic Coding) を改良したもの（ATRAC3 と表記する）が使用できる。

#### 【0014】

ATRAC3 では、44.1 kHz でサンプリングした 1 サンプル 16 ビットのオーディオデータを処理する。ATRAC3 でオーディオデータを処理する時の最小のデータ単位がサウンドユニット SU である。1 SU は、1024 サンプル分（ $1024 \times 16$  ビット  $\times$  2 チャンネル）を数百バイトに圧縮したものであり、時間にして約 2.3 m 秒である。ATRAC3 により約 1/10 にオーディオデータが圧縮される。ミニディスクにおいてそうであるように、ATRAC3 の工夫された信号処理によって、圧縮／伸長処理による音質の劣化は少ない。

#### 【0015】

ライン入力セレクタ 13 は、MD の再生出力、チューナの出力、テープ再生出力を選択的に A/D 変換器 14 に供給する。A/D 変換器 14 は、選択されたライン入力信号を（サンプリング周波数 = 44.1 kHz、1 サンプル = 16 ビット）のデジタルオーディオ信号へ変換する。デジタル入力セレクタ 16 は、MD、CD、CS（衛星デジタル放送）のデジタル出力を選択的にデジタル入力レシーバ 17 に供給する。デジタル入力は、例えば光ケーブルを介して伝

送される。ディジタル入力レシーバ 17 の出力がサンプリングレートコンバータ 15 に供給され、ディジタル入力のサンプリング周波数が 44.1 kHz に変換される。

【0016】

オーディオエンコーダ／デコーダ IC 10 のエンコーダ／デコーダブロック 12 からの符号化データがセキュリティ IC 20 のインタフェース 21 を介して DES の暗号化回路 22 に供給される。DES の暗号化回路 22 は、FIFO 23 を有している。DES の暗号化回路 22 は、コンテンツの著作権を保護するための備えられている。メモリカード 40 にも、DES の暗号化回路が組み込まれている。レコーダの DES の暗号化回路 22 は、複数のマスターキーと機器毎にユニークなストレージキーを持つ。さらに、DES の暗号化回路 22 は、乱数発生回路を持ち、DES の暗号化回路を内蔵するメモリカードと認証およびセッションキーを共有することができる。よりさらに、DES の暗号化回路 22 は、DES の暗号化回路を通してストレージキーでキーをかけなおすことができる。

【0017】

DES の暗号化回路 22 からの暗号化されたオーディオデータが DSP 30 に供給される。DSP 30 は、着脱機構（図示しない）に装着されたメモリカード 40 とメモリインタフェースを介しての通信を行い、暗号化されたデータをフラッシュメモリに書き込む。DSP 30 とメモリカード 40 との間では、シリアル通信がなされる。また、メモリカードの制御に必要なメモリ容量を確保するために、DSP 30 に対して外付けの SRAM (Static Random Access Memory) 31 が接続される。

【0018】

さらに、DSP 30 に対して、バスインタフェース 32 が接続され、図示しない外部のコントローラからのデータがバス 33 を介して DSP 30 に供給される。外部のコントローラは、オーディオシステム全体の動作を制御し、操作部からのユーザの操作に応じて発生した録音指令、再生指令等のデータを DSP 30 にバスインタフェース 32 を介して与える。また、画像情報、文字情報等の付加情報のデータもバスインタフェース 32 を介して DSP 30 に供給される。バス 3

3は、双方向通信路であり、メモ리카ード40から読み出された付加情報データ、制御信号等がDSP30、バスインターフェース32、バス33を介して外部のコントローラに取り込まれる。外部のコントローラは、具体的には、オーディオシステム内に含まれる他の機器例えばアンプ装置に含まれている。さらに、外部のコントローラによって、付加情報の表示、レコーダの動作状態等を表示するための表示が制御される。表示部は、オーディオシステム全体で共用される。ここで、バス33を介して送受信されるデータは、著作物ではないので、暗号化がされない。

#### 【0019】

DSP30によってメモ리카ード40から読み出した暗号化されたオーディオデータは、セキュリティIC20によって復号化され、オーディオエンコーダ／デコーダIC10によってATRAC3の復号化処理を受ける。オーディオエンコーダ／デコーダ10の出力がD/A変換器18に供給され、アナログオーディオ信号へ変換される。そして、アナログオーディオ信号がライン出力端子19に取り出される。

#### 【0020】

ライン出力は、図示しないアンプ装置に伝送され、スピーカまたはヘッドホンにより再生される。D/A変換器18に対してミュートイング信号が外部のコントローラから供給される。ミュートイング信号がミュートイングのオンを示す時には、ライン出力端子19からのオーディオ出力が禁止される。

#### 【0021】

図2は、DSP30の内部構成を示す。DSP30は、コア34と、フラッシュメモリ35と、SRAM36と、バスインターフェース37と、メモ리카ードインターフェース38と、バスおよびバス間のブリッジとで構成される。DSP30は、マイクロコンピュータと同様に機能し、コア34がCPUに相当する。フラッシュメモリ35にDSP30の処理のためのプログラムが格納されている。SRAM36と外部のSRAM31とがRAMとして使用される。

#### 【0022】

DSP30は、バスインターフェース32、37を介して受け取った録音指令等

の操作信号に応答して、所定の暗号化されたオーディオデータ、所定の付加情報データをメモリカード40に対して書き込み、また、これらのデータをメモリカード40から読み出す処理を制御する。すなわち、オーディオデータ、付加情報の記録／再生を行うためのオーディオシステム全体のアプリケーションソフトウェアと、メモリカード40との間にDSP30が位置し、メモリカード40のアクセス、ファイルシステム等のソフトウェアによってDSP30が動作する。

## 【0023】

DSP30におけるメモリカード40上のファイル管理は、既存のパーソナルコンピュータで使用されているFATファイルシステムが使用される。このファイルシステムに加えて、一実施形態では、後述するようなデータ構成のトラック情報管理ファイルが使用される。第1のファイル管理情報としてのトラック情報管理ファイルは、オーディオデータのファイルを管理するものである。第2のファイル管理情報としてのFATは、オーディオデータのファイルとトラック情報管理ファイルを含むメモリカード40のフラッシュメモリ上のファイル全体を管理する。トラック情報管理ファイルは、メモリカード40に記録される。また、FATは、ルートディレクトリ等と共に、予め出荷時にフラッシュメモリ上に書き込まれている。

## 【0024】

なお、一実施形態では、著作権を保護するために、ATRAC3により圧縮されたオーディオデータを暗号化している。一方、付加情報およびトラック情報管理ファイルは、著作権保護が必要ないとして、暗号化を行わないようにしている。また、メモリカードとしても、暗号化機能を持つものと、これを持たないものとがありうる。一実施形態のように、著作物であるオーディオデータを記録するレコーダが使用できるものは、暗号化機能を持つメモリカードのみである。

## 【0025】

図3は、メモリカード40の構成を示す。メモリカード40は、コントロールブロック41とフラッシュメモリ42が1チップICとして構成されたものである。レコーダのDSP30とメモリカード40との間の双方向シリアルインタフェースは、10本の線からなる。主要な4本の線は、データ伝送時にクロックを

伝送するためのクロック線 SCK と、ステータスを伝送するためのステータス線 SBS と、データを伝送するデータ線 DIO、インターラプト線 INT とである。その他に電源供給用線として、2本の GND 線および2本の VCC 線が設けられる。2本の線 Reserve は、未定義の線である。

## 【0026】

クロック線 SCK は、データに同期したクロックを伝送するための線である。ステータス線 SBS は、メモ리카ード 40 のステータスを表す信号を伝送するための線である。データ線 DIO は、コマンドおよび暗号化されたオーディオデータを入出力するための線である。インターラプト線 INT は、メモ리카ード 40 からレコーダの DSP 30 に対しての割り込みを要求するインターラプト信号を伝送する線である。メモ리카ード 40 を装着した時にインターラプト信号が発生する。但し、この一実施形態では、かかるインターラプト信号をデータ線 DIO を介して伝送するようにしているので、インターラプト線 INT を接地し、使用していない。

## 【0027】

コントロールブロック 41 のシリアル/パラレル変換・パラレル/シリアル変換・インタフェースブロック (S/P, P/S, IF ブロックと略す) 43 は、上述した複数の線を介して接続されたレコーダの DSP 30 とコントロールブロック 41 とのインタフェースである。S/P, P/S, IF ブロック 43 は、レコーダの DSP 30 から受け取ったシリアルデータをパラレルデータに変換し、コントロールブロック 41 に取り込み、コントロールブロック 41 からのパラレルデータをシリアルデータに変換してレコーダの DSP 30 に送る。また、S/P, P/S, IF ブロック 43 は、データ線 DIO を介して伝送されるコマンドおよびデータを受け取った時に、フラッシュメモリ 42 に対する通常のアクセスのためのコマンドおよびデータと、暗号化に必要なコマンドおよびデータとを分離する。

## 【0028】

つまり、データ線 DIO を介して伝送されるフォーマットでは、最初にコマンドが伝送され、その後にデータが伝送される。S/P, P/S, IF ブロック 4

3は、コマンドのコードを見て、通常のアクセスに必要なコマンドおよびデータか、暗号化に必要なコマンドおよびデータかを判別する。この判別結果に従って、通常のアクセスに必要なコマンドをコマンドレジスタ44に格納し、データをページバッファ45およびライトレジスタ46に格納する。ライトレジスタ46と関連してエラー訂正符号化回路47が設けられている。ページバッファ45に一時的に蓄えられたデータに対して、エラー訂正符号化回路47がエラー訂正符号の冗長コードを生成する。

#### 【0029】

コマンドレジスタ44、ページバッファ45、ライトレジスタ46およびエラー訂正符号化回路47の出力データがフラッシュメモリインタフェースおよびシーケンサ（メモリI/F、シーケンサと略す）51に供給される。メモリI/F、シーケンサ51は、コントロールブロック41とフラッシュメモリ42とのインタフェースであり、両者の間のデータのやり取りを制御する。メモリI/F、シーケンサ51を介してデータがフラッシュメモリ42に書き込まれる。

#### 【0030】

レコーダのセキュリティIC20とメモリカード40のセキュリティブロック52とによって、フラッシュメモリ42に書き込まれるコンテンツ（ATRAC3により圧縮されたオーディオデータ、以下ATRAC3データと表記する）は、著作権保護のために、暗号化されたものである。セキュリティブロック52は、バッファメモリ53と、DESの暗号化回路54と、不揮発性メモリ55とを有する。

#### 【0031】

メモリカード40のセキュリティブロック52は、複数の認証キーとメモリカード毎にユニークなストレージキーを持つ。不揮発性メモリ55は、暗号化に必要なキーを格納するもので、外部からは見えない。例えばストレージキーが不揮発性メモリ55に格納される。さらに、乱数発生回路を持ち、専用（ある決められたデータフォーマット等の使用が同じシステム内の意味）レコーダと認証ができ、セッションキーを共有できる。よりさらに、DESの暗号化回路54を通してストレージキーでキーのかけ直しができる。

## 【0032】

例えばメモリカード40をレコーダに装着した時に認証がなされる。認証は、レコーダのセキュリティIC20とメモリカード40のセキュリティブロック52によってなされる。レコーダは、装着されたメモリカード40が本人（同じシステム内のメモリカード）であることを認め、また、メモリカード40が相手のレコーダが本人（同じシステム内のレコーダ）であることを認めると、互いに相手が本人であることを確認する。認証が行われると、レコーダとメモリカード40がそれぞれセッションキーを生成し、セッションキーを共有する。セッションキーは、認証の度に生成される。

## 【0033】

そして、メモリカード40に対するコンテンツの書き込み時には、レコーダがセッションキーでコンテンツキーを暗号化してメモリカード40に渡す。メモリカード40では、コンテンツキーをセッションキーで復号し、ストレージキーで暗号化してレコーダに渡す。ストレージキーは、メモリカード40の一つ一つにユニークなキーであり、レコーダは、暗号化されたコンテンツキーを受け取ると、フォーマット処理を行い、暗号化されたコンテンツキーと暗号化されたコンテンツをメモリカード40に書き込む。

## 【0034】

フラッシュメモリ42から読み出されたデータがメモリIF、シーケンサ51を介してページバッファ45、リードレジスタ48、エラー訂正回路49に供給される。ページバッファ45に記憶されたデータがエラー訂正回路49によってエラー訂正がなされる。エラー訂正がされたページバッファ45の出力およびリードレジスタ48の出力がS/P、P/S、IFブロック43に供給され、上述したシリアルインタフェースを介してレコーダのDSP30に供給される。

## 【0035】

読み出し時には、ストレージキーで暗号化されたコンテンツキーとブロックキーで暗号化されたコンテンツとがフラッシュメモリ42から読み出される。セキュリティブロック52によって、ストレージキーでコンテンツキーが復号される。復号したコンテンツキーがセッションキーで暗号化されてレコーダ側に送信さ

れる。レコーダは、受信したセッションキーでコンテンツキーを復号する。レコーダは、復号したコンテンツキーでブロックキーを生成する。このブロックキーによって、暗号化された ATRAC3 データを順次復号する。

【0036】

なお、50 は、メモ리카ード40 のバージョン情報、各種の属性情報等が格納されているコンフィグレーション ROM である。また、メモ리카ード40 には、ユーザが必要に応じて操作可能な誤消去防止用のスイッチ60 が備えられている。このスイッチ60 が消去禁止の接続状態にある場合には、フラッシュメモリ42 を消去することを指示するコマンドがレコーダ側から送られてきても、フラッシュメモリ42 の消去が禁止される。さらに、61 は、メモ리카ード40 の処理のタイミング基準となるクロックを発生する発振器である。

【0037】

図4 は、メモ리카ードを記憶媒体とするコンピュータシステムのファイルシステム処理階層を示す。ファイルシステム処理階層としては、アプリケーション処理層が最上位であり、その下に、ファイル管理処理層、論理アドレス管理層、物理アドレス管理層、フラッシュメモリアクセスが順次おかれる。この階層構造において、ファイル管理処理層が FAT ファイルシステムである。物理アドレスは、フラッシュメモリの各ブロックに対して付されたもので、ブロックと物理アドレスの対応関係は、不変である。論理アドレスは、ファイル管理処理層が論理的に扱うアドレスである。

【0038】

図5 は、メモ리카ード40 におけるフラッシュメモリ42 のデータの物理的構成の一例を示す。フラッシュメモリ42 は、セグメントと称されるデータ単位が所定数のブロック（固定長）へ分割され、1 ブロックが所定数のページ（固定長）へ分割される。フラッシュメモリ42 では、ブロック単位で消去が一括して行われ、書き込みと読み出しは、ページ単位で一括して行われる。各ブロックおよび各ページは、それぞれ同一のサイズとされ、1 ブロックがページ0 からページ m で構成される。1 ブロックは、例えば 8 KB（K バイト）バイトまたは 16 KB の容量とされ、1 ページが 512 B の容量とされる。フラッシュメモリ42 全



体では、1ブロック=8KBの場合で、4MB（512ブロック）、8MB（1024ブロック）とされ、1ブロック=16KBの場合で、16MB（1024ブロック）、32MB（2048ブロック）、64MB（4096ブロック）の容量とされる。

#### 【0039】

1ページは、512バイトのデータ部と16バイトの冗長部とからなる。冗長部の先頭の3バイトは、データの更新に応じて書き換えられるオーバーライト部分とされる。3バイトの各バイトに、先頭から順にブロックステータス、ページステータス、更新ステータスが記録される。冗長部の残りの13バイトの内容は、原則的にデータ部の内容に応じて固定とされる。13バイトは、管理フラグ（1バイト）、論理アドレス（2バイト）、フォーマットリザーブの領域（5バイト）、分散情報ECC（2バイト）およびデータECC（3バイト）からなる。分散情報ECCは、管理フラグ、論理アドレス、フォーマットリザーブに対する誤り訂正用の冗長データであり、データECCは、512バイトのデータに対する誤り訂正用の冗長データである。

#### 【0040】

管理フラグとして、システムフラグ（その値が1：ユーザブロック、0：ブートブロック）、変換テーブルフラグ（1：無効、0：テーブルブロック）、コピー禁止指定（1：OK、0：NG）、アクセス許可（1：free、0：リードプロテクト）の各フラグが記録される。

#### 【0041】

先頭の二つのブロック0およびブロック1がブートブロックである。ブロック1は、ブロック0と同一のデータが書かれるバックアップ用である。ブートブロックは、カード内の有効なブロックの先頭ブロックであり、メモ리카ードを機器に装填した時に最初にアクセスされるブロックである。残りのブロックがユーザブロックである。ブートブロックの先頭のページ0にヘッダ、システムエントリ、ブート&アトリビュート情報が格納される。ページ1に使用禁止ブロックデータが格納される。ページ2にCIS(Card Information Structure)/IDI(Identify Drive Information)が格納される。

## 【0042】

ブートブロックのヘッダは、ブートブロックID、ブートブロック内の有効なエントリ数が記録される。システムエントリには、使用禁止ブロックデータの開始位置、そのデータサイズ、データ種別、CIS/IDIのデータ開始位置、そのデータサイズ、データ種別が記録される。ブート&アトリビュート情報には、メモ리카ードのタイプ（読み出し専用、リードおよびライト可能、両タイプのハイブリッド等）、ブロックサイズ、ブロック数、総ブロック数、セキュリティ対応か否か、カードの製造に関連したデータ（製造年月日等）等が記録される。

## 【0043】

フラッシュメモリは、データの書き換えを行うことにより絶縁膜の劣化を生じ、書き換え回数が制限される。従って、ある同一の記憶領域（ブロック）に対して繰り返し集中的にアクセスがなされることを防止する必要がある。従って、ある物理アドレスに格納されているある論理アドレスのデータを書き換える場合、フラッシュメモリのファイルシステムでは、同一のブロックに対して更新したデータを再度書き込むことはせずに、未使用のブロックに対して更新したデータを書き込むようになされる。その結果、データ更新前における論理アドレスと物理アドレスの対応関係が更新後では、変化する。このような処理（スワップ処理と称する）を行うことで、同一のブロックに対して繰り返して集中的にアクセスがされることが防止され、フラッシュメモリの寿命を延ばすことが可能となる。

## 【0044】

論理アドレスは、一旦ブロックに対して書き込まれたデータに付随するので、更新前のデータと更新後のデータの書き込まれるブロックが移動しても、FATからは、同一のアドレスが見えることになり、以降のアクセスを適正に行うことができる。スワップ処理により論理アドレスと物理アドレスとの対応関係が変化する所以、両者の対応を示す論理-物理アドレス変換テーブルが必要となる。このテーブルを参照することによって、FATが指定した論理アドレスに対応する物理アドレスが特定され、特定された物理アドレスが示すブロックに対するアクセスが可能となる。

## 【0045】

論理－物理アドレス変換テーブルは、DSP30によってSRAM上に格納される。若し、RAM容量が少ない時は、フラッシュメモリ中に格納することができる。このテーブルは、概略的には、昇順に並べた論理アドレス（2バイト）に物理アドレス（2バイト）をそれぞれ対応させたテーブルである。フラッシュメモリの最大容量を128MB（8192ブロック）としているので、2バイトによって8192のアドレスを表すことができる。また、論理－物理アドレス変換テーブルは、セグメント毎に管理され、そのサイズは、フラッシュメモリの容量に応じて大きくなる。例えばフラッシュメモリの容量が8MB（2セグメント）の場合では、2個のセグメントのそれぞれに対して2ページが論理－物理アドレス変換テーブル用に使用される。論理－物理アドレス変換テーブルを、フラッシュメモリ中に格納する時には、上述した各ページの冗長部における管理フラグの所定の1ビットによって、当該ブロックが論理－物理アドレス変換テーブルが格納されているブロックか否かが指示される。

## 【0046】

上述したメモリカードは、ディスク状記録媒体と同様にパーソナルコンピュータのFATファイルシステムによって使用可能なものである。図5には示されていないが、フラッシュメモリ上にIPL領域、FAT領域およびルート・ディレクトリ領域が設けられる。IPL領域には、最初にレコーダのメモリにロードすべきプログラムが書かれているアドレス、並びにメモリの各種情報が書かれている。FAT領域には、ブロック（クラスタ）の関連事項が書かれている。FATには、未使用のブロック、次のブロック番号、不良ブロック、最後のブロックをそれぞれ示す値が規定される。さらに、ルートディレクトリ領域には、ディレクトリエントリ（ファイル属性、更新年月日、開始クラスタ、ファイルサイズ等）が書かれている。

## 【0047】

この一実施形態では、上述したメモリカード40のフォーマットで規定されるファイル管理システムとは別個に、音楽用ファイルに対して、ファイル管理情報（トラック情報管理ファイル）を規定している。トラック情報管理ファイルは、

メモリカード40のユーザブロックを利用してフラッシュメモリ42上に記録される。それによって、後述するように、メモリカード40上のFATが壊れても、ファイルの修復を可能とできる。

## 【0048】

トラック情報管理ファイルは、DSP30により作成される。例えば最初に電源をオンした時に、メモリカード40の装着されているか否かが判定され、メモリカードが装着されている時には、認証が行われる。認証により正規のメモリカードであることが確認されると、フラッシュメモリ42のブートブロックがDSP30に読み込まれる。そして、論理-物理アドレス変換テーブルが読み込まれる。読み込まれたデータは、SRAMに格納される。ユーザが購入して初めて使用するメモリカードでも、出荷時にフラッシュメモリ42には、FATや、ルートディレクトリの書き込みがなされている。トラック情報管理ファイルは、録音が行なされると、作成される。

## 【0049】

すなわち、ユーザのリモートコントロール等によって発生した録音指令が外部のコントローラからバスおよびバスインターフェース32を介してDSP30に与えられる。そして、受信したオーディオデータがエンコーダ/デコーダIC10によって圧縮され、エンコーダ/デコーダIC10からのATRAC3データがセキュリティIC20により暗号化される。DSP30が暗号化されたATRAC3データをメモリカード40のフラッシュメモリ42に記録する。この記録後にFATおよびトラック情報管理ファイルが更新される。ファイルの更新の度、具体的には、オーディオデータの記録を開始し、記録を終了する度に、SRAM31および36上でFATおよびトラック情報管理ファイルが書き換えられる。そして、メモリカード40を外す時に、またはパワーをオフする時に、SRAM31、36からメモリカード40のフラッシュメモリ42上に最終的なFATおよびトラック情報管理ファイルが格納される。この場合、オーディオデータの記録を開始し、記録を終了する度に、フラッシュメモリ42上のFATおよびトラック情報管理ファイルを書き換えても良い。編集を行った場合も、トラック情報管理ファイルの内容が更新される。

## 【0050】

さらに、この一実施形態では、付加情報管理ファイルも作成、更新され、フラッシュメモリ42上に記録される。付加情報管理ファイルの作成、更新は、トラック情報管理ファイルと同様になされる。付加情報は、外部のコントローラからバスおよびバスインターフェース32を介してDSP30に与えられる。DSP30が受信した付加情報をメモリカード40のフラッシュメモリ42上に記録する。付加情報は、セキュリティIC20を通らないので、暗号化されない。付加情報管理ファイルは、メモリカード40を取り外したり、電源オフの時に、DSP30のSRAMからフラッシュメモリ42に書き込まれる。付加情報の記録の度に、フラッシュメモリ42上の付加情報管理ファイルを書き換えても良い。

## 【0051】

図6は、メモリカード40のファイル構成の全体を示す。ディレクトリとして、静止画用ディレクトリ、動画用ディレクトリ、音声用ディレクトリ、制御用ディレクトリ、音楽用ディレクトリが存在する。この一実施形態は、音楽の記録／再生を行うので、以下、音楽用ディレクトリについて説明する。音楽用ディレクトリには、トラック情報管理ファイルTRKLIST.MSFと、トラック情報管理ファイルのバックアップTRKLISTB.MSFと、アーティスト名、ISRCコード、タイムスタンプ、静止画像データ等の各種付加情報データを記述するINFLIST.MSFと、ATRAC3データファイルA3Dnnnn.MSAとからなる。TRKLIST.MSFには、NAME1およびNAME2が含まれる。NAME1は、メモリカード名、曲名ブロック（1バイトコード用）で、ASCII／8859-1の文字コードにより曲名データを記述する領域である。NAME2は、メモリカード名、曲名ブロック（2バイトコード用）で、MS-JIS／ハングル語／中国語等により曲名データを記述する領域である。

## 【0052】

図7は、音楽用ディレクトリのトラック情報管理ファイルTRKLIST.MSFと、NAME1および2と、ATRAC3データファイルA3Dnnnn.MSA間の関係を示す。TRKLIST.MSFは、全体で64Kバイト（＝16K×4）の固定長で、その内の32Kバイトがトラックを管理するパラメータ

を記述するのに使用され、残りの32KバイトがNAME 1および2を記述するのに使用される。曲名等を記述したファイルNAME 1および2は、トラック情報管理ファイルと別扱いでも実現できるが、RAM容量の小さいシステムは、トラック情報管理ファイルと曲名ファイルとを分けない方が管理ファイルをまとめて管理することができ、操作しやすくなる。

#### 【0053】

トラック情報管理ファイルTRKLIST、MSF内のトラック情報領域TRKINF-nnnnnおよびパーツ情報領域PRTINF-nnnnnによって、データファイルA3Dnnnn、MSAおよび付加情報用のINFLIST、MSFが管理される。なお、暗号化の処理を受けるのは、ATRAC3データファイルA3Dnnnn、MSAのみである。図6中で、横方向が16バイト(0~F)であり、縦方向に16進数(0xか16進数を意味する)でその行の先頭の値が示されている。

#### 【0054】

図8を参照して、曲(トラック)とATRAC3データファイルの関係について説明する。1トラックは、1曲を意味する。メモ리카ードに記録できるトラック数は、例えば最大400トラックに制限される。1曲は、ATRAC3データファイルで構成される。ATRAC3データファイルは、ATRAC3により圧縮されたオーディオデータである。メモ리카ード40に対しては、クラスタと呼ばれる単位で記録される。1クラスタは、例えば16KBの容量である。1クラスタに複数のファイルが混じることがない。フラッシュメモリ42を消去する時の最小単位が1ブロックである。音楽データを記録するのに使用するメモ리카ード40の場合、ブロックとクラスタは、同意語であり、且つ1クラスタ=1セクタと定義されている。

#### 【0055】

1曲は、基本的に1パーツで構成されるが、編集が行われると、複数のパーツから1曲が構成されることがある。曲内のパーツのつながりは、トラック情報管理ファイルTRKLIST、MSFに記述する。パーツは、録音開始からその停止までの連続した時間内で記録されたデータの単位を意味し、通常は、1トラッ

クが1パートで構成される。パートの最大値に制限がある。パート数をPとし、トラック数をT(=1~400)とすると、使用できるパートとトラックの間には、 $(P=2043-4 \times T)$ の関係がある。例えば1トラックが2039パートで構成されると、2曲目に割り当てるパートがなくなり、2曲目のファイルを作ることができない。

#### 【0056】

さらに、パートの最小単位は、サウンドユニット(SUと略記する)である。SUは、ATRAC3でオーディオデータを圧縮する時の最小のデータ単位である。44.1kHzのサンプリング周波数で得られた1024サンプル分(1024×16ビット×2チャンネル)のオーディオデータを約1/10に圧縮した数百バイトのデータがSUである。1SUは、時間に換算して約23m秒になる。通常は、数千に及ぶSUによって1つのパートが構成される。

#### 【0057】

図8は、CD等からのオーディオデータを2曲連続して記録する場合のファイル構成を示す。1曲目(ファイル1)が例えば5クラスタで構成される。1曲目と2曲目(ファイル2)の曲間では、1クラスタに二つのファイルが混在することが許されないので、次のクラスタの最初からファイル2が作成される。従って、ファイル1に対応するパート1の終端(1曲目の終端)がクラスタの途中に位置し、クラスタの残りの部分には、データが存在しない。第2曲目(ファイル2)も同様に1パートで構成される。

#### 【0058】

編集操作として、デバイド、コンバイン、イレース、ムーブの4個の操作が規定される。デバイドは、1つの曲を2つに分割することである。デバイドがされると、総曲数が1つ増加する。デバイドは、一つのファイルをファイルシステム上で分割して2つのファイルとし、トラック情報管理ファイルTRKLIST、MSFを更新する。イレースは、曲を消去することである。消された以降の曲番号が1つ減少する。ムーブは、曲順番を変えることである。ムーブの他の意味は、メモ리카ード内ではなく、メモ리카ードから他の媒体例えばハードディスクに曲を移動させる処理のことである。コピーは、オリジナルの複製を作成する操作

であるのに対して、ムーブは、移動のみを意味する。従って、ムーブによって、曲の複製が発生しない。

【0059】

図8に示す二つの曲（ファイル1およびファイル2）をコンバインした結果を図9に示す。コンバインされた結果は、1つのファイルであり、このファイルは、二つのパーツからなる。また、図10は、一つの曲（ファイル1）をクラスタ2の途中でデバインドした結果を示す。デバインドによって、クラスタ0、1およびクラスタ2の前側からなるファイル1と、クラスタ2の後側とクラスタ3および4とからなるファイル2とが発生する。

【0060】

上述した編集操作がなされた場合、ATRAC3データファイルを書き換えると時間がかかるので、編集点を含むブロック（クラスタ）のファイル管理情報TRKLIST、MSFのみが書き直される。このために、パーツという概念が導入されている。

【0061】

図11は、トラック情報管理ファイルTRKLIST、MSFのより詳細な構成を示す。トラック情報管理ファイルTRKLIST、MSFは、1クラスタ（1ブロック）＝16KBのサイズで、その後続くバックアップ用のTRKLISTB、MSFも同一サイズ、同一データのものである。トラック情報管理ファイルは、（0x0000）および（0x0010）で表される先頭から32バイトがヘッダである。なお、ファイル中で先頭から8バイト単位で区切られた単位をスロットと称する。但し、トラック情報管理ファイルの場合には、16バイト単位をスロットと称する。ファイルの最初のスロットに配されるヘッダには、次のデータが先頭から順に配される。

【0062】

BLK ID-TL0/TL1（4バイト）

固定値（TL0＝0x544C2D30，TL1＝0x544C2D31）

T-TRK（2バイト）

総曲数を記述（1～400）



MC o d e (2 バイト)

レコーダのメーカー、機種を識別するメーカーコード  
メモリカードを記録したレコーダのメーカーを特定するための管理コードでライセンスからライセンスする時にそれぞれ与えられる。機種コードは、ライセンスされた各社で管理される

REVISION (4 バイト)

TRKLIST. MSF の書き換え回数で、記録される毎にインクリメント  
YMDhms (4 バイト)

最後に TRKLIST. MSF が更新された年月日

N1 (OP) (1 バイト)

メモリカードの連番号 (分子側) で、1 枚使用時はすべて (0x01) である。  
(OP) は、オプション事項の意味

N2 (OP) (1 バイト)

メモリカードの連番号 (分母側) で、1 枚使用時はすべて (0x01)

MSID (OP) (2 バイト)

メモリカードの ID で、複数組の時は、MSID が同一番号 (T. B. D.)  
(T. B. D. は、将来定義されうることを意味する)

S-TRK (2 バイト)

特別トラック (401~408) の記述 (T. B. D.) で、通常は、0x0000

PASS (OP) (2 バイト)

パスワード (T. B. D.)

APP (OP) (2 バイト)

再生アプリケーションの規定 (T. B. D.) (通常は、0x0000)

INF-S (OP) (2 バイト)

メモリカード全体の付加情報ポインタであり、付加情報がないときは、これが  
これが 00

S\_YMDhms (OP) (4 バイト)

時刻を正確に記録できる機器により TRKLIST. MSF が更新された年月

日。

【0063】

TRKLIST. MSFの最後の16バイトとして、ヘッダ内のものと同一のBLK ID-TL0と、MCODEと、REVISIONとが配される。また、バックアップ用のTRKLISTB. MSFにも上述したヘッダが書かれる。この場合、BLK ID-TL1と、MCODEと、REVISIONとが配される。

【0064】

民生用オーディオ機器として、メモリカードが記録中に抜かれたり、電源が切れることがあり、復活した時にこれらの異常の発生を検出することが必要とされる。上述したように、REVISIONをブロックの先頭と末尾に書き込み、この値を書き換える度に+1インクリメントするようにしている。若し、ブロックの途中で異常終了が発生すると、先頭と末尾のREVISIONの値が一致せず、異常終了を検出することができる。この場合、トラック情報管理ファイルがバックアップを持つので、一つ前の状態に戻すことが容易にできる。バックアップを含めると、REVISIONが4個存在するので、高い確率で異常終了を検出することができる。異常終了の検出時には、エラーメッセージの表示等の警告が発生する。

【0065】

また、1ブロック(16KB)の先頭部分に固定値BLK ID-TL0/TL1を挿入しているので、FATが壊れた場合の修復の目安に固定値を使用できる。すなわち、各ブロックの先頭の固定値を見れば、ファイルの種類を判別することが可能である。しかも、この固定値BLK ID-TL0/TL1は、ブロックのヘッダおよびブロックの終端部分に二重に記述するので、その信頼性のチェックを行うことができる。

【0066】

ATRAC3データファイルは、トラック情報管理ファイルと比較して、相当大きなデータ量(例えば数千のブロックが繋がる場合もある)であり、ATRAC3データファイルに関しては、後述するように、ブロック番号BLOCK S

ERIALが付けられている。但し、ATRAC3データファイルは、通常複数のファイルがメモリカード上に存在するので、CONNUM0でコンテンツの区別を付けた上で、BLOCK SERIALを付けないと、重複が発生し、FATが壊れた場合のファイルの復旧が困難となる。

#### 【0067】

同様に、FATの破壊までにはいたらないが、論理を間違ってファイルとして不都合のあるような場合に、書き込んだメーカーの機種が特定できるように、メーカーコード(MCode)がブロックの先頭と末尾に記録されている。

#### 【0068】

ヘッダの後にトラック(曲)ごとの情報を記述するトラック情報領域TRKINFと、トラック(曲)内のパーツの情報を記述するパーツ情報領域PARTINFが配置される。図11では、TRKLIST.MSFの部分に、これらの領域が全体的に示され、下側のTRKLISTB.MSFの部分にこれらの領域の詳細な構成が示されている。また、斜線で示す領域は、未使用の領域を表す。トラック情報領域TRKINF-*nnn*には、下記の情報が記述される。配置順序に従って以下に説明する。

#### 【0069】

TO (1バイト)

固定値 (TO = 0x74)

LT (1バイト)

再生制限の有無 (0x80 : 再生制限あり、0x00 : 再生制限なし、それ以外 : 再生禁止)

INF-*nnn* (OP) (2バイト)

各トラックの付加情報ポインタ (0~409)、00 : 付加情報がない曲の意味

FNM-*nnn* (4バイト)

ATRAC3データのファイル番号 (0x0000~0xFFFF)

ATRAC3データファイル名 (A3D*nnnnnn*.MSA) の*nnnnnn* (ASCII) 番号を0*nnnnnn*に変換した値

CONTENTS KEY (8 バイト)

コンテンツ毎に作成される特別な値で、メモ리카ードのセキュリティブロック  
の中で暗号化される。

【0070】

S-SAM (D) SERIAL (16 バイト)

メモ리카ードを記録した機器固有のシリアル番号

APP\_CTL (OP) (4 バイト)

アプリケーション用パラメータ (T. B. D.) (通常、0x0000)

CONNUM (4 バイト)

コンテンツ累積番号

コンテンツ毎に作られ、1つのメモ리카ード内で重複しないように、レコーダ  
のセキュリティブロックで保存される

P-nnn (2 バイト)

曲を構成するパーツ数 (1~2039)

XT (OP) (2 バイト)

INXが示すポイントからの再生時間 (SU) を記述

0000: 無設定、FFFF: 曲の終端まで

INX-nnn (OP) (2 バイト)

曲内の特定部分 (所謂さびの部分の先頭) を表すポインタ、曲の先頭からの相  
対SUの数を記述

曲の先頭から10秒程度しか聞けなかったミュージックスキャン機能を改善し  
、さびの部分を指定することを可能とする

YMDhms-S (4 バイト)

再生制限付きのトラックの再生開始日

使用しない時は、0x00000000

YMDhms-E (4 バイト)

再生制限付きのトラックの再生期限日

使用しない時は、0x00000000

MT (1 バイト)

再生条件付きのトラックの再生許可回数

使用しない時は、0x00

CT (1 バイト)

再生条件付きのトラックの再生回数

使用しない時は、0x00

CC (1 バイト)

コピー制御のためのバイトである。00:コピー禁止、01:コピー1世代、10:コピーフリー、コピー第1世代の場合でコピーした子供は、コピー禁止とする

CN (1 バイト)

コピー回数に関するバイトである。00:コピー禁止、01から0xFE:回数、0xFF:回数無制限、コピー第1世代の場合のみ有効、コピー毎にカウントする。

【0071】

パーツ情報領域 PRTINF-nnnn には、下記のように、トラック内のパーツ情報が記述される。配置順序に従って以下に説明する。

【0072】

PR (1 バイト)

固定値 (PR=0x50)

A-nnnn (2 バイト)

パーツの属性情報であり、モード (1 バイト)、SCMS (Serial Copy Management System) 情報 (1 バイト)

PRTSIZE-nnnn (4 バイト)

パーツのクラスタサイズ (2 バイト)、スタートSU (1 バイト)、エンドSU (1 バイト) を記述

PRTKEY-nnnn (8 バイト)

音楽データを暗号化するブロックキーを作るためにコンテンツキーとペアで使われるキー

初期値 0 で、編集操作によってパーツが発生する度に +1 インクリメントされ

る。

#### 【0073】

A-nnnn情報の下位バイトにより記述されるATRAC3のモードを示すモード情報は、図12に示すように規定されている。図12では、ビット0～ビット5を使用して、HQ, SP, CD, LP1, LP2, モノの6種類のモードについて、1SUのバイト数、記録時間（64MBのメモリカードの場合）、データ転送レート、圧縮率がそれぞれ示されている。ビット6は、ステレオか、モノラルかの情報を形成し、ビット7は、圧縮モード、例えばDualモードか、Jointモードかの情報を形成する。

#### 【0074】

図13は、上位バイトにより記述される情報の内容を示す。ビット0は、エンファシスのオン／オフの情報を形成し、ビット1は、再生SKIPか、通常再生かの情報を形成し、ビット2は、データ区分、例えばオーディオデータか、FAX等のデータ音かの情報を形成する。ビット3およびビット4は、予約とする。ビット5およびビット6を組み合わせることによって、図示のように、SCMS情報が形成される。ビット7は、書き込み禁止の可否の情報が形成される。

#### 【0075】

図14は、NAME1（1バイトコードを使用する領域）のより詳細なデータ構成を示す。NAME1および後述のNAME2は、ファイルの先頭から8バイト単位で区切られ、1スロット＝8バイトとされている。先頭の0x8000には、下記のヘッダが記述される。先頭（0x8008）の後ろにポインタおよび名前が記述される。NAME1の最後のスロットにヘッダと同一データが記述される。

#### 【0076】

BLK ID-NM1（4バイト）

ブロックの内容を特定する固定値（NM1＝0x4E4D2D31）

MC ode（2バイト）

会社、機種を識別するためのコード。

## 【0077】

PNM1-nnn (OP) (4 バイト)

NM1 (1 バイトコード) へのポインタ

PNM1-S は、メモリカードを代表する名前のポインタ

nnn (=1~408) は、曲名のポインタ

ポインタは、ブロック内の開始位置 (2 バイト) と文字コードタイプ (2 ビット) とデータサイズ (14 ビット) を記述

開始位置は、NM1 領域の先頭からのバイトオフセット値 (0x000~0x3989)

文字コードタイプは、(0:ASCII, 1:ASCII+仮名, 2:修正8859-1)

データサイズ (14 ビット) は、文字データと終端 (0x00) 1 バイトとを合計した値 (0x000~0x398C)

NM1-nnn (OP)

1 バイトコードで、メモリカード名、曲名データを可変長で記述

名前データの終端コード (0x00) を書き込む。

## 【0078】

図15は、NAME2 (2 バイトコードを使用する領域) のより詳細なデータ構成を示す。先頭 (0x8000) には、下記のヘッダが記述される。先頭 (0x8008) の後ろにポインタおよび名前が記述される。NAME2 の最後のスロットにヘッダと同一データが記述される。

## 【0079】

BLK ID-NM2 (4 バイト)

ブロックの内容を特定する固定値 (NM2=0x4E4D2D32)

MCode (2 バイト)

会社、機種を識別するためのコード。

## 【0080】

PNM2-nnn (OP) (4 バイト)

NM2 (2 バイトコード) へのポインタ

PNM2-Sは、メモリカードを代表する名前のポインタ

nnn (=1~408)は、曲名のポインタ

ポインタは、ブロック内の開始位置(2バイト)と文字コードタイプ(2ビット)とデータサイズ(14ビット)を記述

開始位置は、NM2領域の先頭からのバイトオフセット値(0x000~0x3987)

文字コードタイプは、(0:日本語(MS-JIS), 1:韓国語(KS C 5601-1989), 2:中国語(GB2312-80))

データサイズ(14ビット)は、文字データと終端(0x0000)2バイトとを合計した値(0x000~0x398C)

NM2-nnn(OP)

2バイトコードで、メモリカード名、曲名データを可変長で記述

名前データの終端コード(0x0000)を書き込む。

#### 【0081】

図16は、1SUがNバイトの場合のATRAC3データファイルA3Dnnnnn. MSAのデータ配列(1ブロック分)を示す。このファイルは、1スロット=8バイトである。図15では、各スロットの先頭(0x0000~0x3FFF8)が示されている。ファイルの先頭から4個のスロットがヘッダである。ヘッダには、下記のデータが記述される。なお、ブロックの最後の一つ前のスロットに、BLOCK SEEDが二重記録され、最後のスロットにBLK ID-A3DおよびMCODEが記録される。

#### 【0082】

BLK ID-A3D(4バイト)

ブロックの内容を特定する固定値(A3D=0x41324420)

MCODE(2バイト)

会社、機種を識別するためのコード

編集された場合は書き直す必要あり

BLOCK SEED(8バイト)

暗号化に必要なブロックキーを作るために使用する



ブロックシードの先頭値は、乱数をレコーダのセキュリティブロックで計算  
 続くブロックは、+1 インクリメントしていく

エラー対策としてブロックの最初と最後に同じものを書く

編集されても書き直す必要なし

#### CONNUM (4 バイト)

最初に取得したコンテンツ番号

TRKLIST, MSFのCONNUMと最初は同じ値

編集されても書き直す必要なし

#### BLOCK SERIAL (4 バイト)

ブロックの先頭を0として続くブロックは、+1 インクリメントしていく

編集されても書き直す必要なし

#### INITIALIZATION VECTOR (8 バイト)

ブロック毎にATRAC3データを暗号化、復号化する時に必要な初期値

コンテンツの先頭では、その値は0

続くブロックは、最後のSUの最後の暗号化された値

編集されても書き直す必要なし。

#### 【0083】

ヘッダの後にサウンドユニットデータSU-nnnnnが順に配される。SUは、  
 1024サンプルから圧縮されたデータであり、そのデータ量は、モードにより異なる。編集されても書き直す必要はない。図17がモードとSUのデータ量、  
 1ブロック当たりのSUの数、1ブロック当たりの余り（予約）のデータ量、  
 転送レート、時間を示している。

#### 【0084】

一例として、64MBのメモ리카ードを使用し、CDモードの場合について説明する。  
 64MBのメモ리카ードには、3968ブロックがある。CDモードでは、1SUが320バイトであるので、1ブロックに51SUが存在する。1SUは、  
 $(1024 / 44100)$  秒に相当する。従って、1ブロックは、

$$(1024 / 44100) \times 51 \times (3968 - 16) = 4680 \text{ 秒} = 78 \text{ 分}$$

転送レートは、

$$(44100/1024) \times 320 \times 8 = 110250 \text{ bps}$$

となる。

【0085】

図18は、付加情報を記述するための付加情報管理ファイルINFLIST.MSFのより詳細なデータ構成を示す。このファイルINFLIST.MSFは、トラック情報管理ファイルTRKLIST.MSFの一部をなすので、ファイルの先頭から16バイト単位で区切られ、1スロット=16バイトとされている。先頭(0x0000)には、下記のヘッダが記述される。ヘッダ以降にポインタおよびデータが記述される。

【0086】

BLK ID-INF (4バイト)

ブロックの内容を特定する固定値 (INF=0x494E464F)

T-DAT (2バイト)

総データ数を記述 (0~409)

MC ode (2バイト)

記録した機器のメーカーコード

YMDhms (バイト)

記録更新日時

INF-nnn (4バイト)

付加情報のDATA (可変長、2バイト (スロット) 単位) へのポインタ

開始位置は、上位16ビットで示す (0000~FFFF)

Data Slot-0000の (0x0800) 先頭からのオフセット値 (スロット単位) を示す

データサイズは、下位16ビットで示す (0001~7FFF) (最上位ビットMSBに無効フラグをセットする。MSB=0 (有効を示す)、MSB=1 (無効を示す))

データサイズは、その曲のもつ総データ数を表す

(データは、各スロットの先頭から始まり、データの終了後は、スロットの終わりまで00を書き込むこと)

最初の INF は、アルバム全体の持つ付加情報を示すポインタ（通常 INF-409 で示される）。

#### 【0087】

図 19 は、付加情報データの構成を示す。一つの付加情報データの先頭に 8 バイトのヘッダが付加される。ヘッダは、下記のものである。ヘッダの後に可変長のデータが配される。

#### 【0088】

IN (1 バイト)

固定値 (IN = 0x69)

ID (1 バイト)

ID は付加情報の大きな種類を表す

サブ ID に対してキー ID と呼ばれる

SID (1 バイト)

サブ ID (T. B. D. ) 種類を表す

SIZE (2 バイト)

各 ID 毎の付加情報の大きさをスロット単位で示す (1 ~ 7FFF)

最上位ビット MSB に無効フラグをセットする。MSB = 0 (有効を示す)、  
MSB = 1 (無効を示す)

MCode (2 バイト)

記録した機器のメーカーコード。

#### 【0089】

図 20 は、付加情報の例を示す。サイズが 0x8xxx の場合は、消去または無効のデータを表す。各付加情報は、ヘッダ内のコード例えばキー ID および SID によって区別される。但し、これらの値 (コード) については、未定義のために示されていない。付加情報には、著作権コード ISRC (International Standard Recording Code)、作曲者、アーティスト名等の曲情報、ハードウェア制御情報等が含まれる。曲情報の場合には、データの先頭 2 バイトに記述している文字の文字コードを付加する。

## 【0090】

図21は、一つの付加情報の構成である。このデータ構成において、いくつかの付加情報の具体例を説明する。図22は、付加情報がタイムスタンプの場合を示す。図20に示されるように、タイムスタンプは、録音時のタイムスタンプである。データは、YMDhmsであり、1スロットの余った領域に00が書かれる。図23は、付加情報が再生ログファイルの場合を示す。年月日（YMD）時分秒（hms）のログデータが書かれる。

## 【0091】

図24は、付加情報がアーティスト名+ISRCコード+TOCIDの場合を示す。この例では、1バイトコードを使用してアーティスト名が記述される。スロットの残りには、00が書かれる。次のスロットには、ISRCコードがデータとして書かれる。さらに、その次のスロットには、TOCIDのデータが書かれる。若し、図24に示される付加情報を消去した場合には、図24の付加情報は、図25に示すもの書き換えられる。すなわち、SIZEが（8xxx）とされる。

## 【0092】

上述したこの発明の一実施形態では、メモ리카ードのフォーマットとして規定されているファイルシステムとは別に音楽用データに対するトラック情報管理ファイルTRKLIST.MSFを使用するので、FATが何らかの事故で壊れても、ファイルを修復することが可能となる。図26は、一実施形態のファイル修復処理の流れを示す。ファイル修復のためには、ファイル修復プログラムで動作し、メモ리카ードをアクセスできるコンピュータ（DSP30と同様の機能を有するもの）と、コンピュータに接続された記憶装置（ハードディスク、RAM等）とが使用される。最初のステップ101では、次の処理がなされる。

## 【0093】

FATが壊れたフラッシュメモリの全ブロックを探索し、ブロックの先頭の値（BLKID）がTL-0を探す。このフラッシュメモリの全ブロックを探索し、ブロックの先頭の値（BLKID）がTL-1を探す。このフラッシュメモリの全ブロックを探索し、ブロックの先頭の値（BLKID）がNM-1を探す。

このフラッシュメモリの全ブロックを探索し、ブロックの先頭の値（BLKID）がNM-2を探す。この4ブロック（トラック情報管理ファイル）の全内容は、修復用コンピュータによって例えばハードディスクに収集する。

#### 【0094】

トラック情報管理ファイルの先頭から4バイト目以降のデータから総トラック数mの値を見つけ把握しておく。トラック情報領域TRKINF-001の先頭から20バイト目、1曲目のCONUM-001とそれに続くP-001の値を見つける。P-001の内容から構成されるパーツの総数を把握し、続くPRTINFの中のトラック1を構成する全てのPRTSIZEの値を見つけ出し、それらを合計した総ブロック（クラスタ）数nを計算し、把握しておく。

#### 【0095】

トラック情報管理ファイルは見つかったので、ステップ102では、音のデータファイル（ATRAC3データファイル）を探索する。フラッシュメモリの管理ファイル以外の全ブロックを探索し、ATRAC3データファイルであるブロックの先頭の値（BLKID）がA3Dのブロック群の収集を開始する。

#### 【0096】

A3Dnnnnの中で先頭から16バイト目に位置するCONNUM0の値がトラック情報管理ファイルの1曲目のCONNUM-001と同一で、20バイト目からのBLOCKSERIALの値が0のものを探し出す。これが見つかったら、次のブロック（クラスタ）として同一のCONNUM0の値で、20バイト目からのBLOCKSERIALの値が+1されたもの（ $1=0+1$ ）を探し出す。これが見つかったら、同様に、次のブロック（クラスタ）として同一のCONNUM0の値で、20バイト目からのBLOCKSERIALの値が+1されたもの（ $2=1+1$ ）を探し出す。

#### 【0097】

この処理を繰り返して、トラック1の総クラスタであるn個になるまでATRAC3データファイルを探す。全てが見つかったら、探したブロック（クラスタ）の内容を全てハードディスクに順番に保存する。

【0098】

次のトラック2に関して、上述したトラック1に関する処理を行う。すなわち、CONNUM0の値がトラック情報管理ファイルの1曲目のCONNUM-002と同一で、20バイト目からのBLOCK SERIALの値が0のものを探し出し、以下、トラック1の場合と同様に、最後のブロック（クラスタ）n'までATRAC3データファイルを探し出す。全てが見つかったら、探したブロック（クラスタ）の内容を全て外部のハードディスクに順番に保存する。

【0099】

全トラック（トラック数m）について、以上の処理を繰り返すことによって、全てのATRAC3データファイルが修復用コンピュータが管理する外部のハードディスクに収集される。

【0100】

そして、ステップ103では、FATが壊れたメモ리카ードを再度初期化し、FATを再構築し、所定のディレクトリを作り、トラック情報管理ファイルと、mトラック分のATRAC3データファイルをハードディスク側からメモ리카ードへコピーする。これによって、修復作業が完了する。

【0101】

なお、トラック情報管理ファイル、付加情報管理ファイル、データファイルにおいて、重要なパラメータ（主としてヘッダ内のコード）を二重に限らず、三重以上記録しても良く、重要なパラメータに対して専用のエラー訂正符号の符号化を行うようにしても良い。また、このように多重記録する場合の位置は、ファイルの先頭および末尾の位置に限らず、1ページ単位以上離れた位置であれば有効である。

【0102】

ここで、現在のメモ리카ードに期待されている圧縮率は、上述した図17に示すように1/8～1/30程度である。現在のATRAC3で用いられる1024サンプル/1チャンネルを例に取れば処理の単位であるSUのデータ量（以下、SUの値と称する）が256バイト～70バイト程度の範囲である。

## 【0103】

このSUは、1ブロックに50個程度含まれている。この一実施形態は、この1ブロックの先頭のあるSUの1バイトにある固定値を必ずセットしておけば、暗号を解いて固定値を検出するだけで、正しく暗号化がされたオーディオデータか否かを判定する。例えば、1秒おきに正しく暗号化がされているか否かを判定することができる。そして、異常な再生出力となることが検出された場合は、速やかにミュートイングや表示を行う。上述した図1に示すレコーダにおいては、D/A変換器18において、ミュートイングを行い、異常な再生出力が発生することを防止するようにしている。

## 【0104】

さらに、この発明の一実施形態について、記録時の処理について、図27に示すブロック図を用いて説明する。上述した図1に示すように、オーディオエンコーダ/デコーダIC10からATRAC3で圧縮されたオーディオデータがセキュリティIC20へ供給される。この図27では、オーディオエンコーダ71からATRAC3で圧縮されたオーディオデータが検出部73のシフトレジスタ74へ供給される。シフトレジスタ74から暗号器77へオーディオデータが供給される。一例として、図28に示すシリアル信号がオーディオエンコーダ71からシフトレジスタ74へ供給される。圧縮されたオーディオデータがオーディオエンコーダ71からシフトレジスタ74へ出力されるタイミングは、バイトカウンタ72によって制御される。また、読み出すブロックの先頭のタイミングは、バイトカウンタ72に予めセットされている。

## 【0105】

1ブロックの中には約50のSUが含まれており、この先頭のSUの最初の1バイトがシフトレジスタ74に取り込まれたタイミングで、一致検出回路75によって、このブロックの先頭のSUの最初の1バイトの上位6ビットと、固定値VF1（すなわち（101000））との一致検出が行われる。その判定結果Sc1は、一致検出回路75から出力される。このように、この検出部73では、ATRAC3が施されたSUの1ブロックの先頭の1バイトが固定値VF1に設定されているか否かが確認される。暗号器77では、供給されたオーディオデー

タに対して、キー 78 を用いて、暗号化が施される。暗号器 77 で暗号化されたデータは、メモリカード 40 に書き込まれると共に、復号器 81 へ供給される。

【0106】

復号器 81 では、キー 78 と同じキー 82 を使用して暗号化されたデータが復号され、図 28 に示すようなシリアル信号に変換される。復号器 81 から出力されるシリアル信号は、検出部 84 のシフトレジスタ 85 へ供給される。復号器 81 からシフトレジスタ 85 へ出力されるタイミングは、バイトカウンタ 83 によって制御される。読み出すブロックの先頭のタイミングは、バイトカウンタ 83 に予めセットされている。シフトレジスタ 85 には、1 ブロックの中に約 50 個ほど含まれる SU の先頭の最初の 1 バイトが取り込まれる。一致検出回路 86 では、取り込まれた 1 バイトの上位 6 ビットと、固定値 VF2 (すなわち (101000)) との一致検出が行われる。その判定結果 Sc2 は、一致検出回路 86 から出力される。

【0107】

そして、一致検出回路 75 からの判定結果 Sc1 と、一致検出回路 86 からの判定結果 Sc2 との論理和 (AND) によって、シフトレジスタ 77 および 84 に保持されている 1 バイトのデータの上位 6 ビットと、固定値 VF1 および VF2 が一致していると判定された場合、ヘッダ OK として、判定結果のステータスが出力される。また、一致しなかったと判定された場合、録音時は警告するか、システムにリセットをかけて異常な再生出力となる状態が解決するか様子を見る。

【0108】

実際は、例えば 50 個毎に特定の SU にだけ固定値 VF1 または VF2 をセットするのは大変なので、全部の SU に固定値 VF1 または VF2 をセットしてその一部のみ切り取りをするような方法になる。固定値 VF1 または VF2 が検出されない場合は、エラーフラグが立つ。

【0109】

また、全 SU に固定値をセットする方法によれば、圧縮モードの違いや、LR の位相ズレなどの異常も併せて検出が可能となる。具体的には、上述した図 12



に示すように、この実施形態では、圧縮モードがDualモードとJointモードの2種類があり、且つモノラルがあるので、合計3種類の記録方法がある。

ヘッダの1バイトを

101000-00: Dual (L)

101000-01: Dual (R)

101000-10: Joint

101000-11: モノラル

以上のように定義する。

#### 【0110】

上述した一致検出回路75または86において、シフトレジスタ74または85に保持される1バイトの上位6ビットは、固定値VF1またはVF2と一致検出が行われ、下位2ビットによって、その記録方法が定義される。これにより、このオーディオデータの異常の検出と、圧縮モードの検出が同時に行える。また、圧縮モードの検出が行えることによって、異なる圧縮モードのコンバインなどの混乱の回避も可能である。

#### 【0111】

そして、メモ리카ード40に既に記録されている暗号化が施されたデータを再生する時の処理について、図29を用いて説明する。このとき、上述した図27に示すブロックと同じ機能となるブロックには同じ参照符号を付し、その説明を省略する。メモ리카ード40から読み出され、暗号化が施されたデータが復号器81へ供給される。検出部84では、再生されるオーディオデータの異常な再生出力を検出することができる。再生出力が異常となると判定された場合、再生時はすぐに再生音にミュートイングされ、例えば、上述したように、D/A変換器18に対してミュートイング信号が供給される。シフトレジスタ85から出力されるデータは、オーディオデコーダ88へ供給される。オーディオデコーダ88では、供給されたデータが再生される。

#### 【0112】

ここで、上述した暗号器77によってなされる暗号化の具体的なものとして、DESの使用に際して規定されている4つの利用モードの1つであるCBC (Ci

pher Block Chaining) モードと呼ばれる暗号化を施すものを説明する。この CBC モードを採用している場合には、トラックの先頭から 1 番目のブロック以外のブロックは、常に 1 つ前のブロックの最後の SU の 8 バイトを記憶しておき、エンコードの後、すぐにデコードして、次のブロックの先頭に設けられている固定値が再現できるかのチェックを 1 ブロックおき (時間にして約 1 秒おき) に続けなければならない。

【0113】

CBC モードでは、トラックの先頭から 1 番目のブロックの先頭の SU の最初の 8 バイト  $P_1$  は、イニシャライゼーション・ベクトル  $INV$  と排他的論理和 (EXOR) が行われ、キー  $K$  によって暗号化が行われる。ここで、DES : 暗号化、 $P_i$  : 平文、 $C_i$  : 暗号文、 $K$  : キー、 $(+)$  : 排他的論理和の記号と表記すると、

$$DES(P_1(+) INV, K) = C_1$$

となる。

【0114】

トラックの頭から 1 番目のブロック以外のブロックの暗号化には、直前の暗号化した出力 (暗号文)  $C_1$  を必要とするので、次の 8 バイトの暗号化は、

$$DES(P_2(+) C_1, K) = C_2$$

となる。

【0115】

このように、暗号化は 8 バイトの単位で DES が行われるため、ブロックの先頭の 8 バイト (先頭データ) を暗号化するために直前の SU の最後の暗号化 8 バイト (直前データ) を必要とするので、暗号器 77 には、先頭データおよび直前データを記憶することができる一時保管メモリが必要となる。

【0116】

そして、上述した復号器 81 によって、暗号文の復号が行われる。ここで、IDES : 復号化と表記すると、

$$\begin{aligned} IDES(C_1, K)(+) INV \\ = P_1(+) INV(+) INV = P_1 \end{aligned}$$

となる。

#### 【0117】

トラックの頭から1番目のブロック以外のブロックの復号には、直前の暗号文 C1を必要とするので、次の8バイトの復号化は、

$$\begin{aligned} & \text{IDES}(C2, K)(+)C1 \\ & = P2(+)C1(+)C1 = P2 \end{aligned}$$

となる。

#### 【0118】

このように、復号は暗号化と同様8バイトの単位でDESが行われるため、ブロックの先頭の暗号文8バイト（先頭データ）を復号するために直前のSUの最後の暗号文8バイト（直前データ）を必要とするので、復号器81には、先頭データおよび直前データを記憶することができる一時保管メモリが必要となる。

#### 【0119】

このように、記録時のATrac3の出力をチェックすることができる。さらに、暗号をかけた後でもブロックの先頭データと直前データとを一時記憶する一時保管メモリを有する復号器を用意することによって、エンコードしたデータのチェックを同様に行うことができる。

#### 【0120】

##### 【発明の効果】

この発明に依れば、暗号化が施されていても、そのブロックの先頭のSUの1バイトが所定値か否かを判定することによって、そのブロックの異常を検出することができるので、異常な再生出力を防止することができる。また、既に記録されているデータを再生するときに、そのデータの再生出力が異常となるような場合、そのデータの再生出力を防止することができる。さらに、同時に圧縮のモードの検出を行うこともでき、異なる圧縮モードのコンバインなどの混乱を回避することもできる。

##### 【図面の簡単な説明】

#### 【図1】

この発明の一実施形態の全体的構成を示すブロック図である。

【図 2】

この発明の一実施形態における DSP の構成を示すブロック図である。

【図 3】

この発明の一実施形態におけるメモリカードの構成を示すブロック図である。

【図 4】

この発明の一実施形態におけるフラッシュメモリのファイルシステム処理階層の構成を示す略線図である。

【図 5】

この発明の一実施形態におけるフラッシュメモリのデータの物理的構成のフォーマットを示す略線図である。

【図 6】

この発明の一実施形態におけるファイルの規定を示す略線図である。

【図 7】

この発明の一実施形態におけるファイル間の関係を示す略線図である。

【図 8】

この発明の一実施形態におけるデータファイルの構成を示す略線図である。

【図 9】

この発明の一実施形態におけるデータファイルの編集処理の一例を示す略線図である。

【図 1 0】

この発明の一実施形態におけるデータファイルの編集処理の他の例を示す略線図である。

【図 1 1】

この発明の一実施形態におけるトラック情報管理ファイルの構成を示す略線図である。

【図 1 2】

トラック情報管理ファイル中のパーツ属性情報の規定を示す略線図である。

【図 1 3】

トラック情報管理ファイル中のパーツ属性情報の規定を示す略線図である。

【図 1 4】

トラック情報管理ファイル中の名前ファイルの構成を示す略線図である。

【図 1 5】

トラック情報管理ファイル中の名前ファイルの構成を示す略線図である。

【図 1 6】

データファイルの構成を示す略線図である。

【図 1 7】

この発明の一実施形態における録音モードの種類と、各録音モードにおける録音時間等を示す略線図である。

【図 1 8】

この発明の一実施形態における付加情報管理ファイルの構成を示す略線図である。

【図 1 9】

この発明の一実施形態における付加情報データの構成を示す略線図である。

【図 2 0】

この発明の一実施形態における付加情報の例を示す略線図である。

【図 2 1】

この発明の一実施形態における付加情報の構成を示す略線図である。

【図 2 2】

付加情報がタイムスタンプの場合の構成を示す略線図である。

【図 2 3】

付加情報が再生ログファイルの場合の構成を示す略線図である。

【図 2 4】

付加情報がアーティスト名の場合の構成を示す略線図である。

【図 2 5】

付加情報（アーティスト名）を消去した場合の構成を示す略線図である。

【図 2 6】

ファイル修復処理の流れを説明するための略線図である。

【図 27】

この発明の一実施形態における異常な再生出力を検出する一例を示すブロック図である。

【図 28】

この発明のデータを説明するための略線図である。

【図 29】

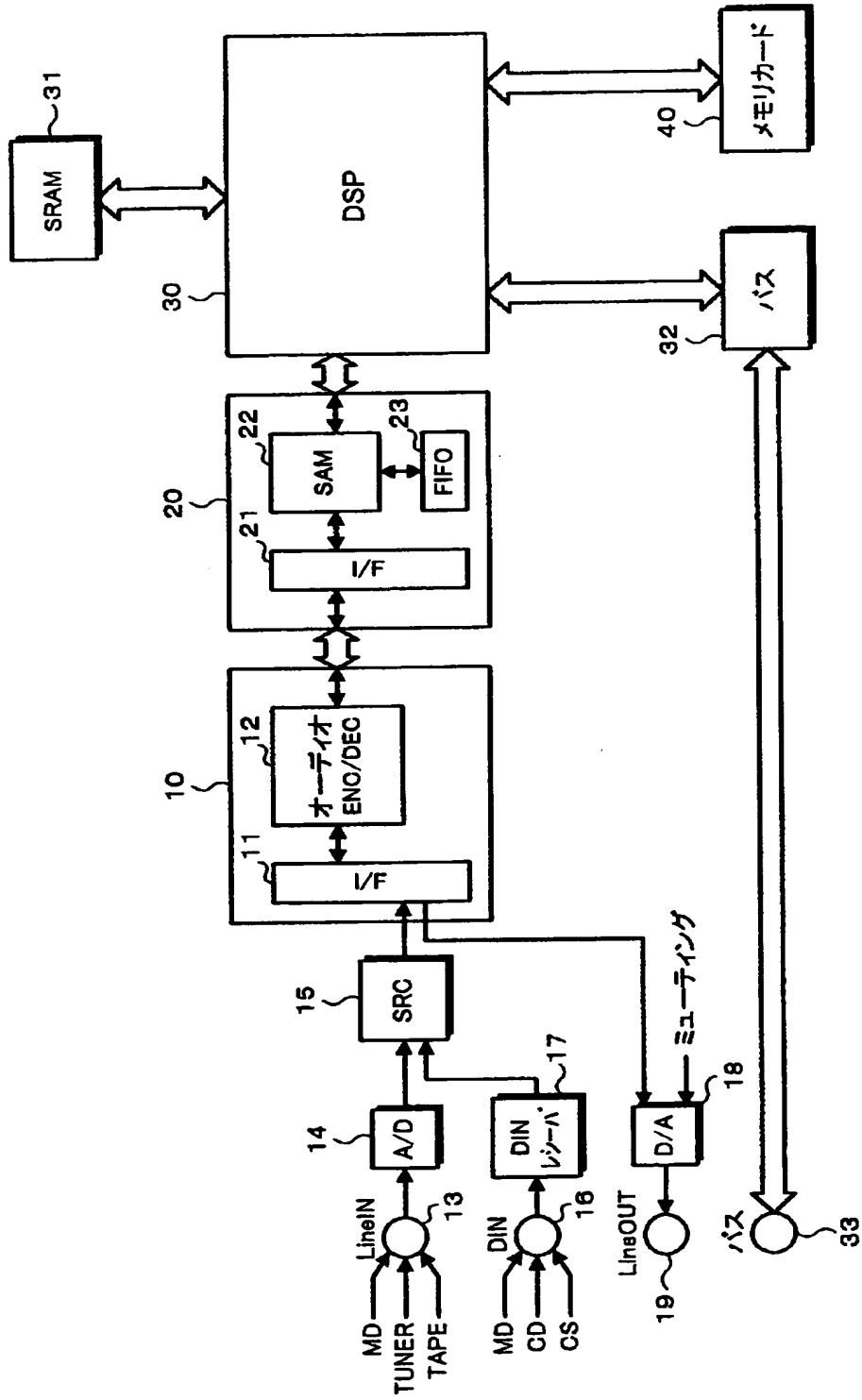
この発明の一実施形態における異常な再生出力を検出する一例を示すブロック図である。

【符号の説明】

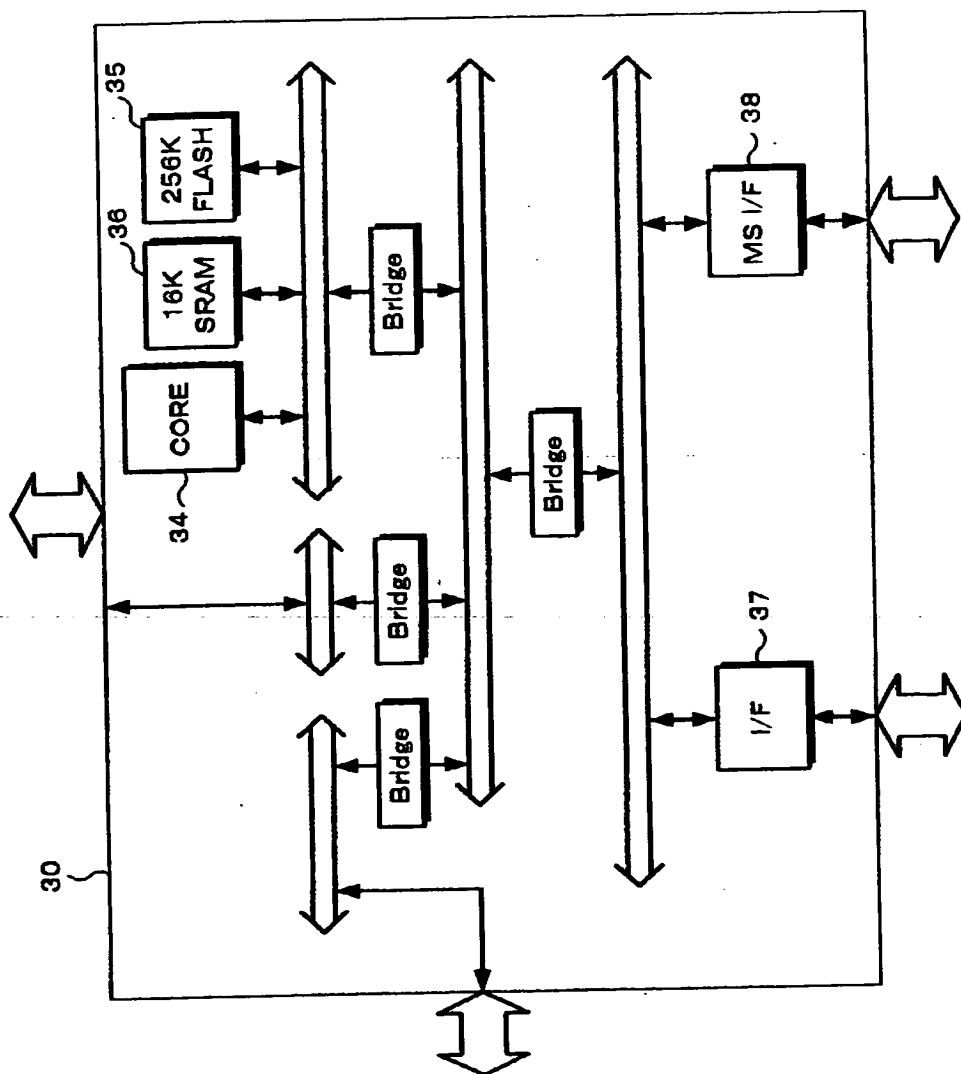
10・・・オーディオエンコーダ／デコーダIC、20・・・セキュリティIC、30・・・DSP、40・・・メモ리카ード、42・・・フラッシュメモリ、52・・・セキュリティブロック、TRKLIST.MSF・・・トラック情報管理ファイル、INFLIST.MSF・・・付加情報管理ファイル、A3Dnnn.MSA・・・オーディオデータファイル

【書類名】 図面

【図 1】

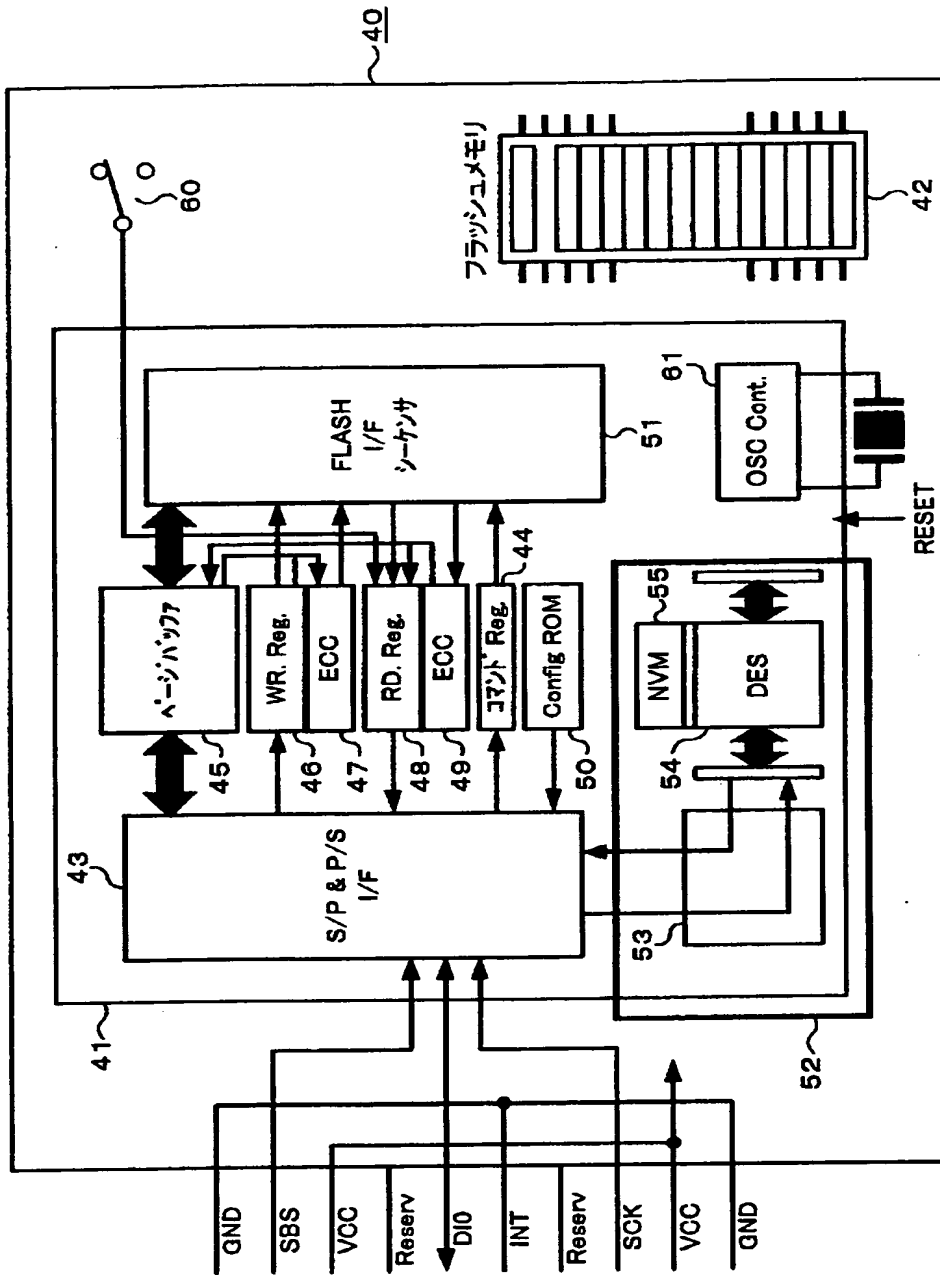


【図 2】





【図 3】

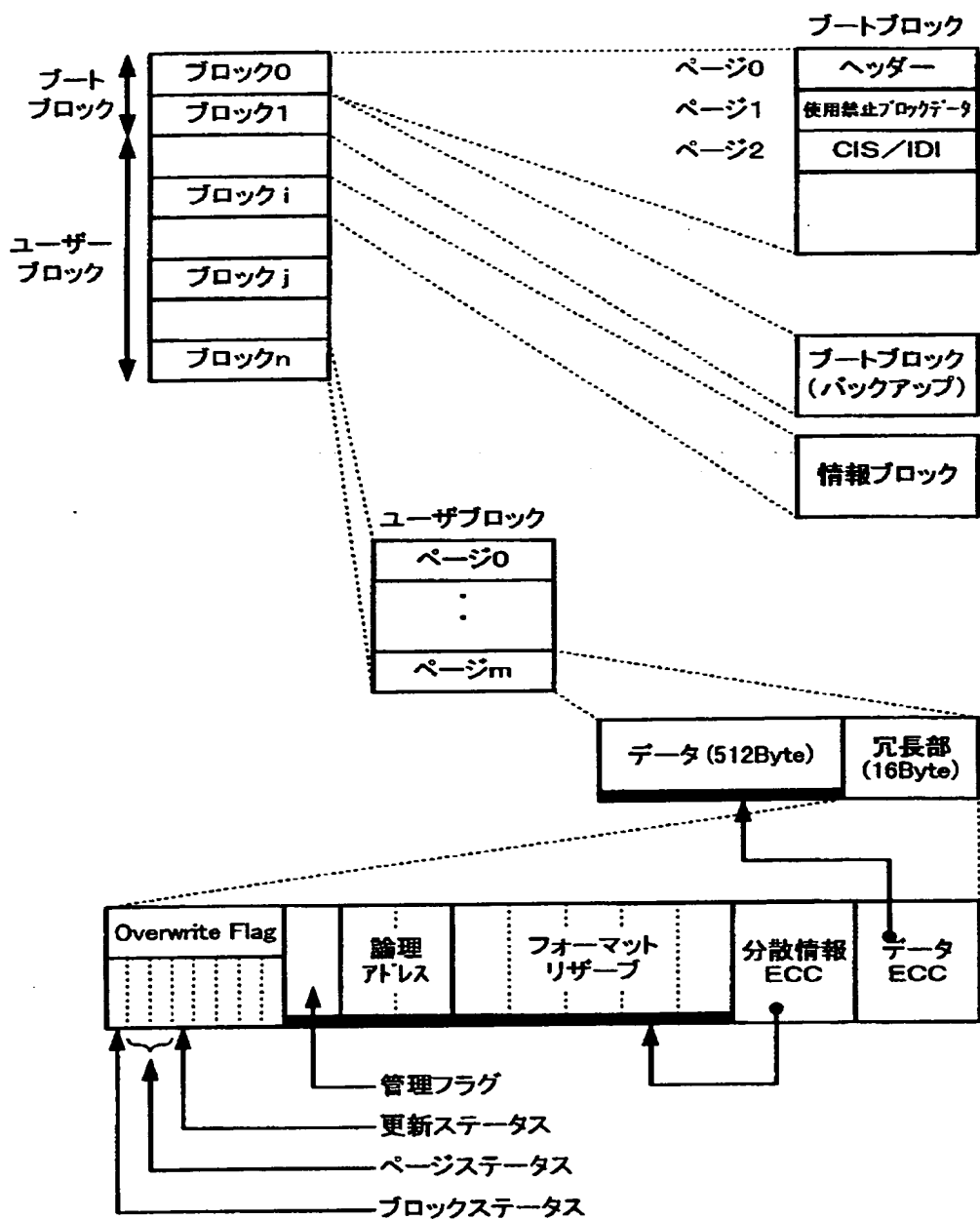


【図 4】

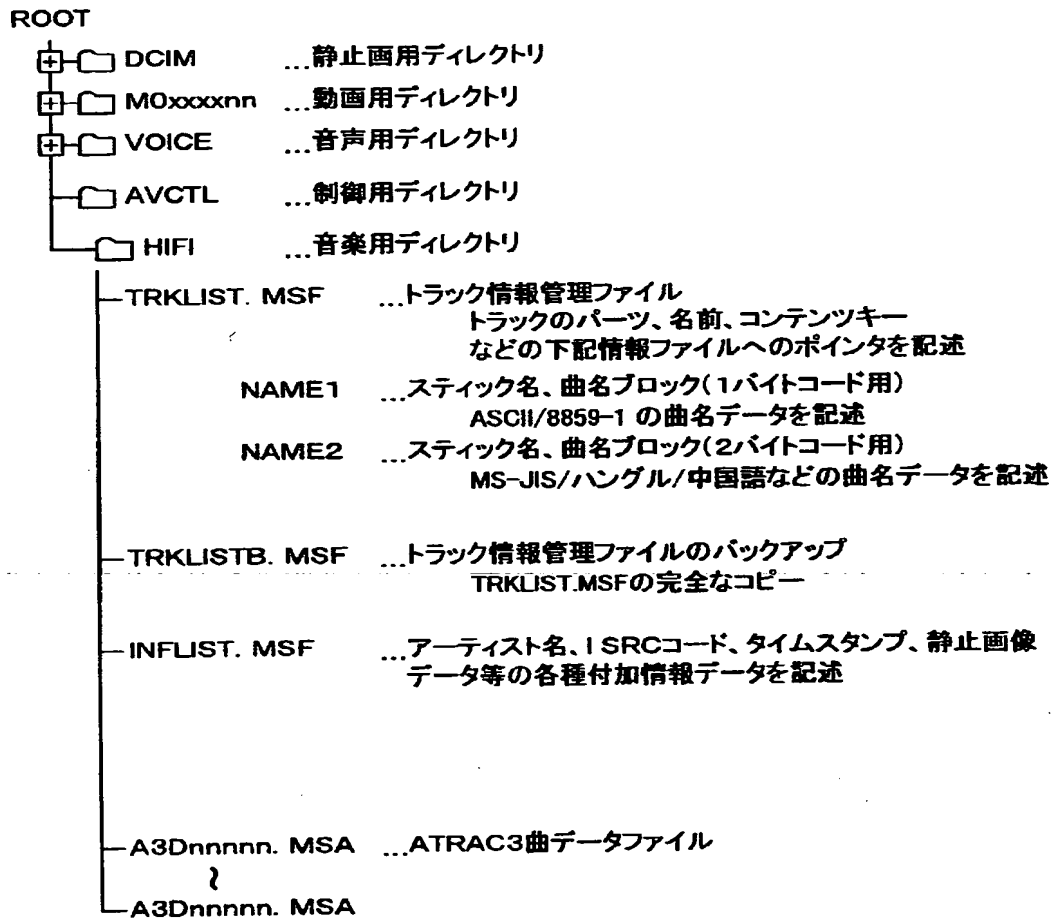
アプリケーション処理
ファイル管理処理
論理アドレス管理
物理アドレス管理
フラッシュメモリアクセス

ファイルシステム処理階層

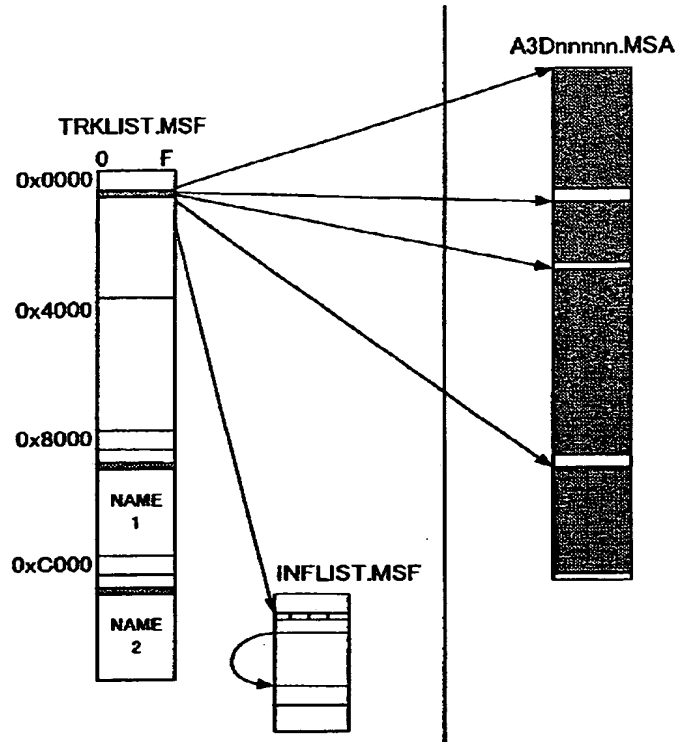
【図 5】



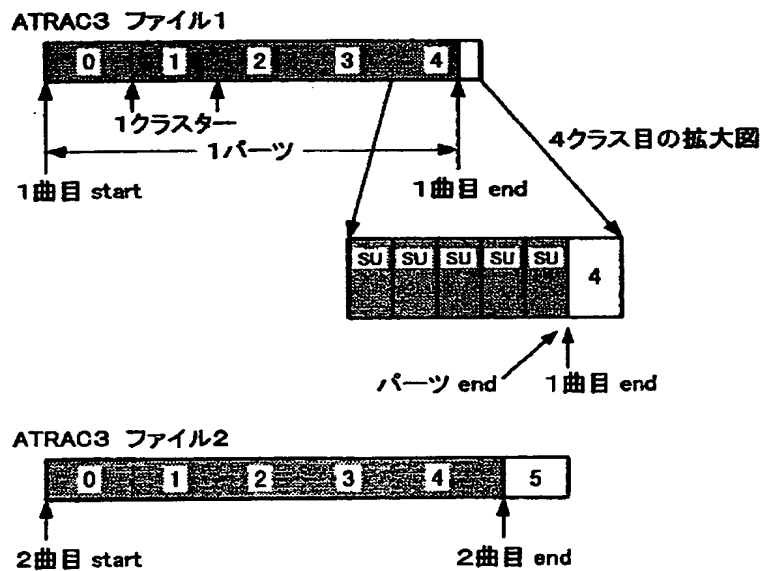
【図 6】



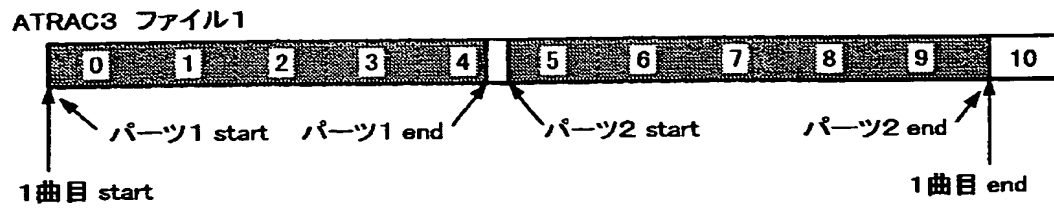
【図 7】



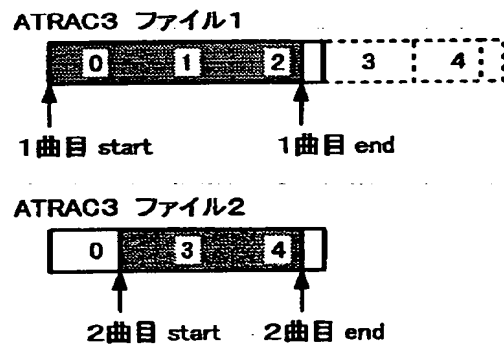
【図 8】



【図9】



【図10】



【図 11】

トラック情報管理ファイル (TRKLIST.MSF)

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	A	B	C	D	E	F
0x0000	BLK ID-TL0				T-TRK		MCode		REVISION				YMD h ms			
0x0010	N1	N2	MSID		S-TRK		PASS		APP		INF-S		S_YMD h ms			
0x0020	TRKINF-001															
	-----															
	PRTINF-001															
	-----															
	TRKINF-002															
	-----															
	PRTINF-002															
	}															
0x3FF0	BLK ID-TL0						MCode		REVISION							
0x4000	BLK ID-TL1						MCode		REVISION							
	}															
	TRKINF- <i>nnn</i> /PRTINF- <i>nnn</i> の詳細															
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	A	B	C	D	E	F
	TO	LT	INF		FNM- <i>nnn</i>				CONTENTS KEY- <i>nnn</i>							
	- <i>nnn</i> S-SAM(D) SERIAL- <i>nnn</i>															
	APP_CTL				CONNUM- <i>nnn</i>				P- <i>nnn</i>		XT		INX- <i>nnn</i>			
	YMDhms-S				YMDhms-E				MT	CT	CC	CN	Reserved			
	PR		A-0000			PRTSIZE-0000				PRTKEY-0000						
	}															
	PR		A- <i>nnnn</i>			PRTSIZE- <i>nnnn</i>				PRTKEY- <i>nnnn</i>						
	/															
0x7FF0	BLK ID-TL1						MCode		REVISION							

【図 1 2】

A-nnn情報 (PRTINF-nnn)

Bit7 圧縮モード      0: Dual      1: Joint  
 Bit6 チャンネル      0: ステレオ      1: モノラル

Bit5~Bit0	n モード	時間(バイト数)	転送レート	圧縮率
下位バイト      モード情報	63: HQ	47min(512)	176kbps	1/8
	47: SP	64min(384)	132kbps	1/11
バイト8×n+8	39: CD	78min(320)	110kbps	1/13
	31: LP1	96min(256)	88kbps	1/16
	23: LP2	130min(192)	66kbps	1/21
	16: モノ	184min(136)	47kbps	1/30

上記以外のコードはすべて予約

【図 1 3】

A-nnn情報 (PRTINF-nnn)

上位バイト

bit7 書き込み禁止      0: 書き込み可      1: 書き込み禁止(業務用のみ可)  
 bit6 コピー許可      0: コピー禁止      1: コピー可  
 bit5 世代      0: オリジナル      1: 第一世代以上

(例)SCMS情報      x11 無制限のコピーを許可  
                          x01 コピー禁止  
                          x00 1回のコピーを許可

bit4,3      予約(通常0)  
 bit2 データ区分      0: オーディオ      1: FAX等のデータ音(ミュート対象)  
 bit1 再生SKIP      0: 通常再生      1: SKIP(機能のある機器では再生しない)  
 bit0 エンファシス      0: off      1: on (50/15 μs)



【図 14】

スティック名、曲名ブロック 1バイト用エリア

	0	1	2	3	4	5	6	7
0x8000	BLK ID-NM1						MCode	
0x8008	PNM1-S				PNM1-001			
0x8010	PNM1-002				PNM1-003			
					⋮			
0x8668	PNM1-408				NM1-S			
	NM1-001							
	NM1-002							
	NM1-003							
	⋮							
	NM1-408							
0xBFF0								
0xBFF8	BLK ID-NM1						MCode	

【図 15】

スティック名、曲名ブロック 2バイト用エリア

	0	1	2	3	4	5	6	7
0xC000	BLK ID-NM2						MCode	
0xC008	PNM2-S				PNM2-001			
0xC010	PNM2-002				PNM2-003			
					⋮			
0xC668	PNM2-408				NM2-S			
	NM2-001							
	NM2-002							
	NM2-003							
	⋮							
	NM2-408							
0xFFFF0								
0xFFFF8	BLK ID-NM2						MCode	

【图 16】

ATRAC3 データファイル (A3Dnnnnn.MSA) ... 1SoundUnit N byte の場合

	0	1	2	3	4	5	6	7
0x0000	BLK ID-A3D						MCode	
0x0008	BLOCK SEED							
0x0010	CONNUM0				BLOCK SERIAL			
0x0018	INITIALIZATION VECTOR							
0x0020	SU-000 (N byte)							
0x0020 +N/8	SU-001 (N byte)							
	SU-002 (N byte)							
	}							
	SU-(nnn-1) (N byte)							
0x3FF0 -N/8	Reserved (M byte)							
0x3FF0	BLOCK SEED							
0x3FF8	BLK ID-A3D						MCode	

【図 1 7】

録音モードの種類

Mode	Nbyte	SU-nnn	Reserved(M)	Rate	min
HQ	512	31	512-6	176k	47
SP	384	42	256-8	132k	64
CD	320	51	64-6	110k	78
LP1_j	256	63	256-8	88k	96
LP2_j	192	85	64-6	66k	130
Mono	136	120	64-6	47k	184

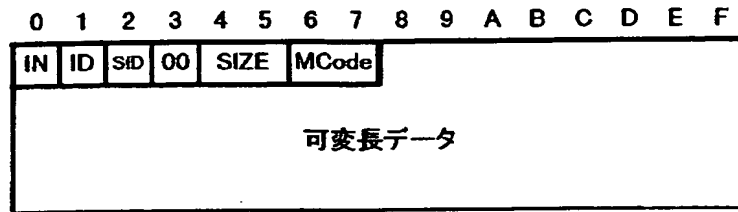
【図 1 8】

付加情報管理ファイル (INF LIST.MSF)

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	A	B	C	D	E	F
0x0000	BLK ID-INF			T-DAT		MCode		YMDhms				INF-409				
0x0010	INF-001			INF-002			INF-003				INF-004					
0x0020	INF-005			INF-006			INF-007				INF-008					
	}			}			}				}					
0x0660	INF-405			INF-406			INF-407				INF-408					
0x07F0	Reserved															
0x0800	DataSlot-0000															
0x0810	DataSlot-0001															
	}															
0x3FF0	DataSlot-03 7F(895dec)															
0x4000	DataSlot-03 8 0															
	}															
	DataSlot-FFFF(最大値)															

【図 1 9】

付加情報DATA構成



【図 20】

付加情報例

種類	サイズ	内容
	8バイト	TOC-ID 各桁7bit(1+7×9)バイナリー表示 最初の曲番号、最後の曲番号、その曲番号 総演奏時間(msf)、その曲の演奏時間(msf) ISRCコード(58bit (6×5+4×7→32+32))
	8バイト	ISRC(International Standard Recording Code)著作権コード 12桁58bit(8×5+2,4×7+6) 12桁で 1～12 11～12 国コード 13～15 所有者コード 11～15 6bit形式×5+2bitZer 16～17 録音年 18～12 シリアル番号 16～12 4bitBCD×7+6bitZero
	7バイト	UPC/EAN/JANコード52bit(4×13→8×7)
可変		EMD関連情報1
可変		EMD関連情報2

曲情報(データの先頭2バイトに文字コードを付ける。)

可変	作詞者名
可変	作曲者名
可変	ディスク情報URL
可変	歌詞データへのパス
可変	画像データへのパス
可変	MIDIデータへのパス
可変	解説データへのパス
可変	コメント
可変	CMデータへのパス
2バイト	ジャンルコード
可変	アルバム名
可変	アーティスト名/グループ名

ハード制御情報

1バイト	平均音量
2バイト	再生回数(実行数/指定数) 学習用
可変	送信メッセージ
可変	受信メッセージ
4バイト	再生ログデータ 年月日時(YMDhms)
4バイト	再生レジュームポインター(機能(1)クラスタ(2)SU(1))
可変(16)	GPS位置情報(再生時)
可変(16)	GPS位置情報(記録時)
可変	パスワード1
可変	パスワード2
可変	制御データへのパス
4バイト	録音時タイムスタンプ(YMDhms) 2秒単位
4バイト	サブトラック(連番(2)SU(4)) INXと同じ記述

【図 2 1】

付加情報構成

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	A	B	C	D	E	F
IN	ID	SD	00	SIZE	MCode	DATA-n									

【図 2 2】

付加情報(タイプスタンプ)構成例

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	A	B	C	D	E	F
96				00	01	MCode	YMD	hms					00	00	00
							7	4	5	5	6	5			

【図 2 3】

付加情報(再生ログファイル)構成例

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	A	B	C	D	E	F
0x01	96			00	00	20	MCode		Reserved				Reserved			
0x02	YMDhms_1				YMDhms_2				YMDhms_3				YMDhms_4			
0x03	YMDhms_5				YMDhms_6				YMDhms_7				YMDhms_8			
	YMDhms_9				YMDhms_A				YMDhms_B				YMDhms_C			
0x19	YMDhms_5D				YMDhms_5E				YMDhms_5F				YMDhms_60			
0x1A	YMDhms_61				YMDhms_62				YMDhms_63				YMDhms_64			

【図 2 4】

付加情報(アーティスト名+ISRC+TOCID)構成例

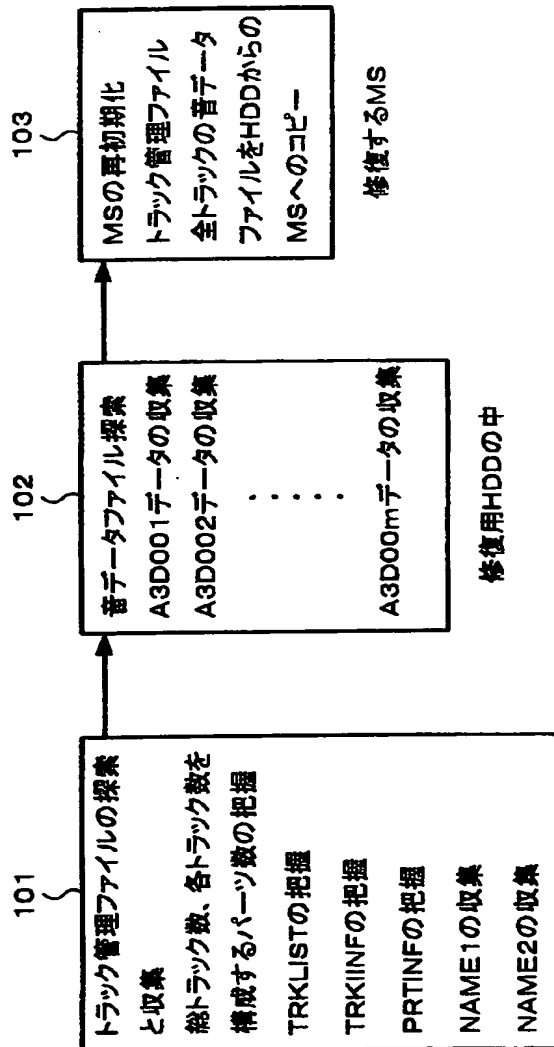
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	A	B	C	D	E	F
	96				00	02	MCode	C E L I N E								
	D I N E				00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00
	96				00	01	MCode	ISRC Code								
	96				00	01	MCode	TOC-ID								

【図 2 5】

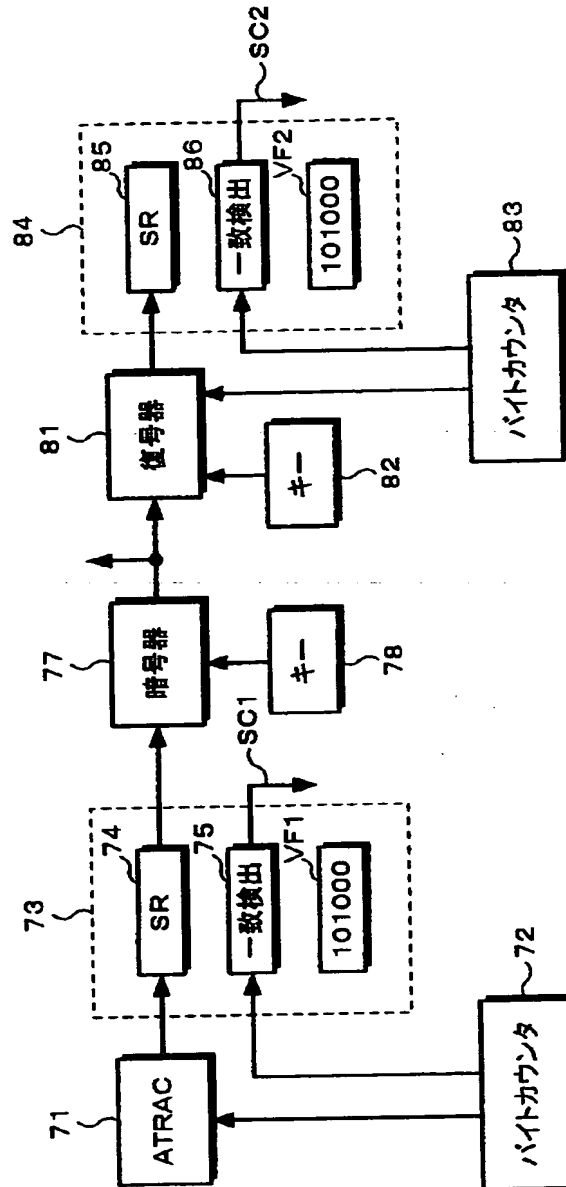
上記付加情報(アーティスト名+ISRC+TOCID)を簡易消去した例

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	A	B	C	D	E	F
96				80	02	MCode				C	E	L	I	N	E
	D	I	N	E	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00
96				80	01	MCode									
96				80	01	MCode									

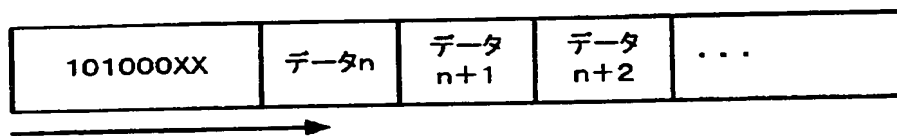
【図 2 6】



【図 27】

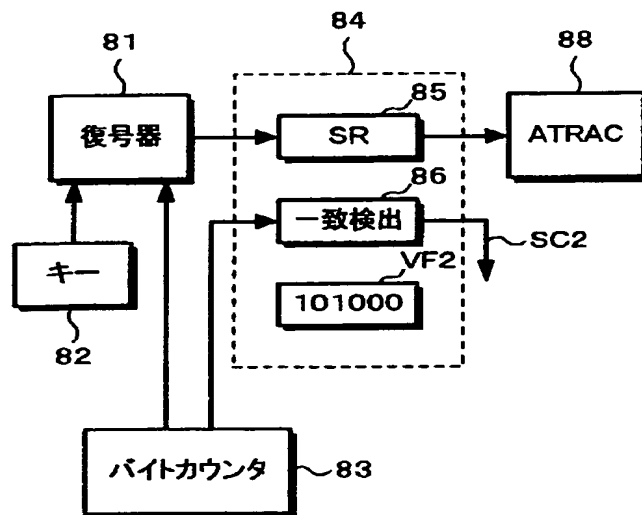


【図 28】





【図 2 9】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 オーディオデータに暗号化を施している場合でも、異常な再生出力が生じることを防止することができる。

【解決手段】 A T R A C 処理回路 7 1 から圧縮されたオーディオデータがシフトレジスタ 7 4 へ供給される。ブロックの先頭の S U がシフトレジスタ 7 4 に供給された場合、一致検出回路 7 5 によって、S U の最初の 1 バイトの上位 6 ビットと、固定値 7 6 との一致検出が行われる。暗号器 7 7 では、供給されたオーディオデータに対して、キー 7 8 用いて、暗号化が施される。復号器 8 1 では、暗号化されたデータが復号され、一致検出回路 8 6 で一致検出が行われる。一致検出回路 7 5 からの判定結果 S c 1 と、一致検出回路 8 6 からの判定結果 S c 2 との論理和によって、一致したと判定された場合、ヘッダ O K とし、一致していないと判定された場合、ミューデイングする。

【選択図】 図 2 7

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号 [000002185]

1. 変更年月日	1990年 8月30日
[変更理由]	新規登録
住 所	東京都品川区北品川6丁目7番35号
氏 名	ソニー株式会社

**This Page Blank (uspto)**